
屋根の上から望む月

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋根の上から望む月

【Nコード】

N7883N

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

多分…

私は死んだのだ。

お化けはこの世から影響を受ける事は出来るが、影響を与える事は出来ない、滅多な事がない限り…。

人身事故で死んでお化けとなった繭子は黒髪でちょっと粹なお化け、ひなきと出会う。繭子は死に別れた婚約者の翔を見守り、彼の幸せを願うのだが翔の幸せは必ずしも繭子の幸せという訳ではない。

繭子はひなきと共に屋根の上で寝転びながら今日も町を眺めている。

踏切のお化け

耳を劈くような金属音を上げて目の前で電車が停まる。

遮断機を下ろしたまま淡々と警告音を鳴らし続けている踏切の前で私達二人は茫然とその様を眺めているだけだった。

「あれ？何があつたのかな…ねえ、美妃」
よく状況が飲み込めない。

私は突如として目の前に現れた巨大な鉄の塊に唯圧倒されていた。一緒にいた友人の美妃に何気無く訊いてみても彼女は口に手を当てて驚いているような顔をしているだけだ。

事故だろうか…。

まるで私達を威嚇するようにきりきりと頭に響く金属の擦れる音をゆつくりと鳴らした後、しゅう、と大きく息を噴き出したような音を上げて漸く電車は完全に動きを止めた。電車が静かになると何故か緊張感も解けて肩の力が抜けた。

ふと視線を上げると電車の窓からも乗客達が怪訝な面持ちでこちらを見下ろしている。どうやら彼らも私達と同じく何が起こったのか解らないらしい。

辺りは時が止まってしまったかのように静まり返り、同時に何とも言えない緊張感に包まれた。

「ま、繭子…ちよつと…繭子つたら…」

そう美妃がぼそりと呟く。

美妃は力無く私の名前を呼んで目を丸くしている。その視線は車体の下の薄暗い空間に向けられている。どうしたの、と訊き返しても美妃はぼかんとしているだけで心ここに在らずと言った様子だ。

辺りの静寂は徐々に破られ始める。

どやどやと野次馬が踏切の周りに集まり出す。

四人程の乗務員が車内から線路へ飛び出してきて忙しく車体の下

へと腰を屈めて潜り込んで行く。最寄りの駅からも数名、駅の係員が駆け付けて来た。彼らは何やら青いビニールシートを持って来たらしい。

踏切は遮断機を下ろしたままで警告音を鳴らすのを止めた。

「どうしたんだろうね、事故でもあったのかな？」

独り言のようにそんな事をぶつぶつと言っていると周りを取り囲む野次馬が何やらひそひそと喋っているのが耳に入った。

人身事故だつてさ…

轢かれたんだろ…

えげつねえな…

女の子が線路に飛び込んだんだって…

あれは助からないだろうな…

彼らは口々にそんな事を言っている。振り返って各々の顔を見回してみると皆一様に眉に皺を寄せて気の毒そうな顔をしている。しかしその表情の裏には好奇の眼差しが垣間見られるような気がした。人の死という非日常的な出来事をどこか面白がっているように感じる。

…言い方は悪いがそう思えた。

彼らにとつて轢かれたのは家族でもなければ知人ですらない、心を痛めずに死の瞬間という滅多に遭遇する事の無い瞬間を見る事が出来て得した気分にもなっているのだろうか。

全く非道い話だ。

しかし私にはそんな彼らを糾弾する事も否定する事も出来ない。実を言えば私も謂わば同じ穴の貉むじななのだろう。その証拠にさつと立ち去れば良いものを態々（わざわざ）遮断機の真正面に立ったまま、車両の下で見え隠れする事故の処理作業を熟と凝視みつめている。だからと言って決して残酷な物を見たい訳ではなければ、人の不幸を面白がって揶揄やしようと言う気持ちも毛頭ない。

唯、事の顛末てんまつを知りたいだけなのだ。

平たく言ってしまうえば少し気になる（……）のだ。

それだけなのだ。

幾らそんな事を頭の中で主張した所で全く意味は無い。自分も周りの野次馬と本質的には何も変わらない。第三者から見れば自分も野次馬の一人でしかないのだ。

自分の今の行動をそう結論付けると辟易^{へきえき}としてきた。そう感じながらもその場を動こうと出来ない自分を少し厭に思う。

急に辺りが騒がしくなった。

乗務員が車輪の下から何かを引き摺り出したのだ。

別世界のように暗い車両の下でその何か（・・・）は青いビニールシートに包まれ^{くる}、漸く太陽の下の世界に還って来た。しかしそれは元いたこちらの世界よりも車両の下のような薄暗い世界の方がよく似合っているように思える。二人がかりでその何か（・・・）は担架に乗せられ線路の傍らに寝かせられた。

厭に存在感がある…

手前の乗務員が退いた刹那、一番前にいた私には見えてしまった。…見たくはなかった。

その時、全身の毛が逆立ち吐気すら覚えた。
ビニールシートの隙間から血の気の失せた白、否^{いや}、灰色の細い脚が覗いている。

もうこれは人ではない。

車輪と線路に挟まれ引き摺られた所為か両足に靴は無く、片足の靴下は半分脱げかかっている。そして所謂^{いわゆる}死後硬直と言うものなのだろうか、その脚は爪先までぴんと真っ直ぐ伸びたままで凍り付いたように固まっていた。まるで死の直前の恐怖という激情だけが今も尚その躰^{からだ}に留まっているようで鬼魅^{きみ}が悪い。

その様は脚というより棒や木の枝と言った印象も受けた。

…そう思っていたかった。

…しかしそれは確実に脚の形をしていた。

その後、気が付いた乗務員に直ぐ捲れかけていたビニールシート

は被せ直されたのだが私の脳裡にはその灰色の脚が確^{しっか}りと焼き付いている。もう誤魔化せない。自分の見た物を誤魔化す事は出来ない。車輪の下にあった何か（・・・）は…

…死体だ。

目の前に置かれている青いシートにはもう人ではない…徒^{ただ}の肉の塊が包まれている。私はそれを啞然として見降ろしていた。少し手を伸ばせば届くような場所に死体が置かれている。その薄いビニールシートを隔てて死体が置かれている。

…人間だった物が

そう考えると酸い腐臭、生臭い死臭が鼻を衝いてくるような気がして吐きそうになった。

気持ち悪い。

その時、靴の先に何かが触った感触を覚えた。

…足元に何かがある。

恐る恐る翳^{かす}んだ目を擦りながら足元にある物を確認した。

その正体が判った時、私はぎよっとした。

足元に女の頭部が転がっている。

私は目を剥き言葉にならない悲鳴を上げてその生首から逃げるように後に飛び退いた。美妃の後ろに隠れて彼女の肩越しからもう一度地面に転がっていた物をそろりと覗きこもうとした。

…見間違えであって欲しい。

電車による人身事故は自動車などのそれとは違って車体の重みの所為で勢いが付き、衝突した時の衝撃で四肢が四散する事があると聞いた事がある。まさかその際に事故に遭った女性の頭部が？^もげてこちらに転がって来ていたとでも言うのだろうか。

美妃の肩の上から目だけを覗かせ、再び私は短い悲鳴を上げた。

…あつた。

見間違えではなかった。矢張りその女の頭部はそこにある。勇氣

を出してよく見るとそれは地面に転がっているのではない。

地面から生えている…ように見える。

それは黒い髪を波状に広げて^{コンクリート}混凝土の地面から顔半分、鼻から上を出している。明らかに異形だ。先程見てしまった脚と同じく血の通っていない白い肌をしていて、生命を宿していない磁器人形^{ビスクドール}のように虚ろな瞳をしていた。

何より異常だったのは私の傍にいる美妃は愚か、そこにいる誰もがその頭部の存在を無視していると言う事だ。これは無視している訳ではなく恐らく気付いていない、寧ろ視えてすらいらないのかもしれない。

この世のものではない。

これは一体何なのだろうか。

私は一つの単語を思い浮かべた。

…お化け。

そうだ。そうに違いない。

今、電車に轢かれて死んだ女が化けて出て来たのだ。

その顔はどこか朦朧としているようだ。余りに突然の出来事だったのできつと自分が死んだと言う事を理解出来ていないのだろう。不気味だ。不気味ではあるが…何か…可哀想に思えた。

しかし次の瞬間、その僅かな同情のような感情を払拭するように私の背中に冷たいものが走った。

…動いた。

今まで人形のようにぴくりとも動かなかったその目が確かに瞬きをした。そして更に背筋が凍るような事は続く。

目が合った。

いつの間にか女はその虚ろな硝子玉のような瞳を私に向けている。私をじいつと視ている。

私が見えている事に気付いたのだろうか。私は恐ろしさで指一本動かす事は愚か呼吸すら^{まま}儘ならない状態に陥り、暫くその女と目を合わせたまま対峙していた。

そのままどれくらい経っただろう。

女が動いた。

ずぶずぶと泥沼から上がって来るようにして女は地面からその姿を露わにしてふらりと揺れながら軀をこちらに向けた。そしてそのぎんと開かれた死んだ魚のような瞳で確りと私の目を見据えたまま一歩ずつ、ひたりひたりと近付いて来る。

「やだ…来ないでよ！」

私は美妃の背に顔を隠した。

「美妃、ねえ美妃ったら！何なのよあれ！」

私が美妃の背中越しに声を荒げてもやはり彼女はその異形の者に気付いていないらしい。彼女は微動だにせず、車輪の下から引き摺り出された「人」だったものを熟^{じう}と視ている。

—わかる？

噎^{しやぶ}れた声が鼓膜を撫でた。辺りの喧騒とは関係なく否応なしに向けられる声。生きている者が発したそれとは明らかに異質の音。ヘッドフォンから流れているようにどこへ隠れようとも耳元で聞こえるようなその囁き。

その声は私だけに向けられている。

あの女だ…

…わかる？

何をわかと訊いているのだろうか。そんな短い問いからではその言葉の真意は酌めない。自分の姿が見えるかどうかを訊いているのだろうか。それならば残念ながら私には見えてしまっている。だが何を伝えようとしているのかは解らない。目的の解らないものがここまで不気味だとは思わなかった。

再び私が顔をひよこりと出すと矢張りその女はこちらを向いていた。

それは肩の力が抜けているように両腕をだらんと垂らしている。周りの空気が動いてもその長い髪はその動きに影響される事無く揺れる事は無い。まるで切り取られた写真のようにその女の存在は浮

いていた。

長い前髪の隙間から女の口元が覗いている。

女は…薄く笑っている。

私の躰は凍り付いたように動かなくなった。蛇に睨まれた蛙とはまさにこのような事を言うのだろう。唯一許されているのは必要最低限の呼吸をする事だけ。私はぽっかりとだらしなく口を開いたまままで固まっていた。

呼吸を整えると少しだけ躰に自由が戻った。私が瞬きをしている刹那に忽然とその女は姿を消した。

…どこ？

視えなくなると余計に恐怖を掻き立てられる。私は目だけを忙しなく辺りに配らせた。野次馬の中、車両の下、そして足元。

…いない。

女はいなくなっていた。

その瞬間、完全に躰の自由が戻った。まるで怖い夢から醒めたようだ。一気に躰の力が抜けた。緊張から解放されて大きく息を吐く。

その時、一陣の風が踏切を吹き抜けた。

砂埃が舞い上がり、顔を背けるように私は目を瞑った。そして風が止むとゆっくりと目を開けた。

何か違和感がある。

私が目を瞑っていたほんの数秒の間に何か雰囲気が変わっている。私だけがその変化に着いて行けていないようだ。

野次馬から「うわぁ」と言う呻き声にも悲鳴にも似たざわめきが起こる。

事故処理をしていた乗務員がしまったという顔をしている。

そして傍らにいる美妃は顔を真っ青にして鯉のように口をぱくぱくしている。

…どうしたんだろう

野次馬も、乗務員も、美妃も、総ての視線は同じ方向に向けられ

ている。

線路の方だ。

私もその視線を辿って行くと正確には線路ではなく、その脇に放置されている「人」だった物のある場所に向けられている事に気が付いた。

私の躰は再び自由を奪われ固まった。

今の風でシートが捲れて無残な亡骸が露わになっている。

糸が切れて壊れた傀儡人形マリオネットのように首がぐちゃぐちゃに曲がり、腕もその両足と同じく硬直しているらしく助けを求めるように手を上げたままの状態で指までぴんと伸ばして固まっている。そしてその曇った目は開かれたまま寂しい秋空に向けられている。

乗務員が慌ててその女の遺体をシートで隠したがもう遅い、その場にいた全員の網膜にその壮絶な死の彫刻は刷り込まれているだろう。

私の舌の奥がからからに乾いた。

―わかる…でしょう？

また、あの声が耳元で聞こえた。

…解る。

私は目を円くしたまま小さく頷いた。不思議とその声はもう怖くなかった。私にはその女が訊いている意味が解った。

私の前に立っていた美妃がふらりと前のめりに倒れるように一歩足を踏み出した。その時彼女の口元が少し動いたが余りに小さい声だった為か辺りのざわめきに掻き消され聞こえなかった。

私はぽつんと一人その場に立っている。

「繭子！」

美妃は私の名前を叫びながら踏切に向かって駆け出した。正確に言うところ踏切ではなくその奥の青いビニールシートに包まれた物にだ。遮断機を潜り、線路に入ろうとした美妃は直ぐに乗務員たちに制止させられた。彼女は腰が抜けたようにその場でへたり込み、おんむせおんと咽び泣いている。繭子、繭子と私の名前を呼びながら。

遠くの方から救急車の騒がしいサイレンが^{こたま}のよう^にに響いて来る。
今更、もう遅いと思っていた。

私は視た。

シートが捲れ上がって露わになったあの死体。

それはぐちゃぐちゃに変形していたが私には解った。そしてそれが何を意味しているのかも何となく理解できているつもりだ。

あの死体は…。

あの死体は私だった。

多分…

私は死んだのだ。

ショートケーキ

翔は耳に受話器を当てたまま固まっている。

ああとかうんと言った生返事をする事が精一杯だ。電話の内容は上手く頭に入って来ず、わなわなと肩と唇を震わせている。電話台に片手を突いて脱力したように項垂れ、受話器から紡ぎ出される声を唯聞いているだけだった。

うん、わかった…そう言つて翔は電話を切り、静かに受話器を置いた。まるで受話器が暴れ出すのを押さえ付けているかのように、暫くそのまま受話器から手を離さなかった。否、離せないのだ。

頭の中で散らかっている情報を上手く整理出来ない。

頬が冷たくなっていく。非道く心地が悪い。

緩めたネクタイの下に覗く首筋に一筋の汗が滴る。冷や汗だった。季節は少しずつ冬に近付いており、未だ七時を回った頃だと言うのにもう陽は完全に沈んでしまつて灯りを点けていない翔の部屋は真っ暗だ。

左手の薬指に付けた指輪が悲しく光る。

翔は来月結婚する事が決まつていて幸せに満たされていた。

平凡な会社員として平凡な生活を送っている平凡な彼にとつてその婚約者の存在はかけがえのないものであり、唯一の安らぎであり、そして唯一の幸せであつた。

婚約者である彼女とは学生時代からの付き合いだった。別にどちらからと言う訳でもなく気が付いたら彼氏彼女と言う関係になつていたような気がする。お互い似た者同士で自然と魅かれ合つていたのだ。映画のように劇的な出来事も無ければ少女漫画のような波瀾ロマンティックも無かつた。

唯、一緒に居られるだけで幸せだった。

本当に…

…幸せだった。

今日は彼女が家に来る予定だったので翔は仕事が終わった後、同僚の飲みの誘いも断つていそいそと帰って来たのだ。職場の同僚や上司も翔の結婚を心から祝福してくれている。誘いを断った時も同僚から「幸せ者！」と揶^{から}われて、照れ笑いを浮かべていた。

帰って来る途中、駅前のケーキ屋を見た時にふと彼女の顔が頭に浮かんだ。

…莓。

彼女は莓が大好きだ。

以前、莓味のチョコレート差し出した時に彼女は満面の笑みでくると回りながら喜び、まるで少女のようにチョコレートを美味しそうに頬張っていた。甘いもの、特に莓が大好物なのだそう。その笑顔を思い出して胸がほっこり温かくなった。

自然と翔の口元は幸せそうに緩み、彼女の為に大きな莓の乗ったショートケーキを買って帰る事にした。

翔は嬉々として家路を急いだ。

…今日は何を話そう。

彼女に会うのが楽しみで仕方がない。

他愛のない事でも彼女はうんうんと頷きながら興味深げに聞してくれる。そして笑ってくれる。それだけで翔は幸せなのだ。

家の扉を開けると電話の呼出音がけたたましく鳴っていた。

電話と言う物はあまり好きではない。理由は簡単、掛かって来た時吃驚^{びっくり}するからだ。急かされるようにケーキの入った菓子箱^{テンプル}を洋卓の上に置き、慌てて受話器を取った。

相手は彼女の親友である人物だった。

電話越しの声が震えている。

様子が変だ。

…どうしたのだろうか。

そして受話器の向こうから信じられないような言葉が発せられる。

漸く翔は受話器から手を離し、俯いたままふらふらとソファに座りこんだ。そして両手で顔を覆った。

電話の内容が俄かに信じられない。

信じたくないのかもしれない。

電話口から伝えられた事を真実として受け入れてしまえば恐らく翔は壊れてしまっただろう。自分でもそれは解っているのだ。だから受け入れないようにしている。

…嘘だ。

…嘘に決まっている。

両手で顔全体をこしこしと擦って今の厭な気持ちを紛らわそうとしても、脳裡に刷り込まれたその言葉はどうしても拭い去る事が出来ない。

もしそれが真実なのだとすれば彼女の為に買って来た洋卓の上に置いてある大きな苺のショートケーキも無駄になる。誰も食べる者がいなくなってしまうのだ。そして薬指に光る指輪に込めた誓いも永遠に果たせないものになってしまう。

悲報。

彼女は死んだ。

今日の昼。丁度翔が会社で仕事をしながら彼女に会う事を楽しみにして早く勤務時間が終わらないかなどと考えていた頃だ。その時は本当に呆けたように幸せな顔をして仕事などそっちのけで上の空だった。

そんな時に彼女は死んだそうだ。

人身事故。

彼女は踏切で通過しようとする特急列車に轢かれて命を落とした。見ているだけでも即死と判る程の惨状だったらしい。彼女の友人も非道く取り乱していたがそんな内容の事を明瞭と言っていた。

余りに突然の事で翔は信じられない。

そして何より想像したくないのだ。

自分が愛する者の死の瞬間を。

冷たい鉄の塊に撞り潰された愛する者の無残な姿を。

その無残な姿が大衆に晒されている様を。

少し凝じようとしていると徐々に現実味を帯びて来るのが堪らなく厭いとだった。愛する者の冷たくなつた姿が頭の中で具現化されようとしている。翔はその像を振り払うようにううと呻うめきながら頭を掻き毟る。彼女にもう会えない、もう触れられない、もう声も聞けない、そしてもう大好きなあの笑顔も見られない。何の前触れもなく永遠の別れは訪れた。

翔の幸せは奪われたのだ。

ソファアの背凭せもたれに首を預けるように仰向けになり翔は天井を見上げる。そして大きく息を吐いた。

涙は流してはいけない。涙を流すというその行為は感情を制御する事が出来なくなつたという信号サインである。つまりそれは自分の感情を支配出来なくなつたということであり、理性で生きる人間にとつてその現象は鳥獣と同類という位までの退行を表す。翔は平生そう思っていて出来るだけ感情を表に出さずに生きて来た。

それに今回は更に泣いてはいけない理由があつた。涙を流すと彼女の死がより現実のものとして押し迫つて来るような気がしたからだ。だから翔は必死に感情を偽り、必死に堪えていた。

しかしその感情の堤も容易く決壊する。

自然と瞳に涙が溢れて来て、一筋の涙がつうと翔の頬をなぞつた。案の定、その一滴を皮切りに悲壮感は渦を巻き溢れ出した。

涙が止まらない。

もう泣いているのにも拘らず翔は未だ泣くもんかと天井を見上げながら両の拳をきつく結んでひくひくと嗚咽おえつを漏らしている。止めどなく溢れる彼の涙はやがて首筋、耳までも濡らすようになっていた。

食い縛った齒を少し緩めて、ぽそりと彼女の名前を零こぼした。

…繭子。

どろどろの悪霊

—わかる？

その言葉の意味が解った途端に怖くなった。

昼間でも薄暗い高架下。苔こけの生えた壁を這うパイプから不潔そうな水がひたひたと漏れ出していて、どこか黴臭かびい。冷たく湿った壁に背を当てて私は立ち止まった。

私は兎とに角走かくった。兎に角独りになりたかったのだ。そう、兎に角独りになりたくてここまで逃げて来たのだ。

…逃げる？

何から逃げて来たのだろう。

好奇の目をした野次馬から、地面から這い上がって来たあの女から、恐怖に慄おのく美妃から、それとも無残にも引き裂かれた自らの死体と言う血塗れの現実からなのだろうか。自分でも良く判らなかった。徒ただその怖い何かから逃げて来たのだ。

高架の上で電車がごとごとという音を鳴らしながら通り過ぎて行く。私を揺り潰した電車もどうやら再び動き始めているようだ。頭上で重たい金属の塊が鉄の線路に擦れて空気を震わせている。

変な気分だ。

また私はあの車輪の下にいる。

本当に…変な気分だ。

ごとごとと騒ぐだけ騒いだかと思うと頭上の電車は走り去った。すうつ、と残響だけを漂わせていたがやがて辺りは深閑となる。

私の周りから音が消えた。

…誰もいなくなった。

私は徐に首を擡もたげて格子のように交差した線路と枕木の間から覗く曇り空を見上げて小さく息をした。

するとどこからかまたあの声が私に語りかけてきた。

―もう、わかったかい？

私は軽く頷いた。

勿論解っている。私は死んだのだ、今頭上を通り過ぎた電車の下敷きになって…

…今の私は

…お化け

―今からアンタの前に出るけど、怖がらないでくれよ。

再び私は頷く。

しかしいざ出ると言われると流石に怖い。恐らく声の主も今の私と同じお化けなのだろう。それにしても態々^{わざわざ}出る事を宣言するお化けもいるのだどこか滑稽に思えた。

―右を見て。

声に促されるように顔を向けて、私は息を飲んだ。

苔の生えた薄汚い壁から二本の白い腕が伸びている。手は力無くだらりと垂れていたかと思うと突然何かを探るように忙しく指先を動かし始めた。

―大丈夫さ、何もしないから。

ずぶずぶと女は壁から軀を現した。

血の通っていないような白い肌。

それを包み込む真っ白なブラウス。

夜を凝縮したように真っ黒な長い髪。

間違いない。さっきの女だ。

私は動く事も出来ずに唯茫然と立ち竦んでいた。すると女は顔に掛かった長い髪を細い薬指で掻き分けた。

そして私の前に回り込んで…にこりと笑った。

「初めまして、お譲ちゃん」

意外な言葉に呆気^{あっけ}に取られて私も思わず初めましてと挨拶を返した。すると女は口元に手を遣って愉快そうにくすくすと笑っている。

…何だろう。

…全然怖くない。

寧ろよく見ると美人だ。

女は整った目鼻立ちをしていて艶やかな黒髪と純白のブラウスと
コントラストの対照が良く映えている。 齡は私より少し上、二十代後半ぐらいだ
ろつか、少なくとも三十は越えていないだろう。それも話し方にど
こか昔臭い印象があるからの判断で実際は私と同じぐらいか、見よ
うによつては十代にも見えなくもない。

「それにしてもアンタも壮絶な死に方だったねえ、痛かっただろ？」
女は口元を緩めて相変わらずにこにこしながら問い掛けて来る。

正直痛くはなかった、それどころか余りに突然過ぎて自分が死ん
でいる事すら気付かなかったぐらいだ。 どう答えて良いかも解らず
私は口を噤んだ。つく

「そんなに緊張してないで何か喋っておくれよ」

女は愉快そうに笑っている。 その笑い方は快活ではあるがどこか
品がある。 それに笑うと更に若々しく見え、まるで少女のような無
邪気さや清らかささえ窺える。

「あ、あなたもしかして…お化け…ですか？」

「うーん、まあそんな所だね。 要するにアンタの先輩ってやつさ」

先輩…どうやら私も彼女と同じような存在のようだ。 第三者から
そう言われると改めてそれを実感できる。

…矢張り私は死んだらしい。

「怖かったかい？」

女は薄く笑って上目遣いに訊いてくる。

「何がですか？」

「だから、ほら。 妾がさ」
わたし

怖くない訳がない。

突然地面から現れたかと思うと、長い黒髪に白いブラウスという
ホラー典型的な恐怖映画の幽霊のような姿でよろよろと歩いて来るのだか
ら。

私がいと首肯すると女は口を横に広げてにたりと笑っている。

「ごめんよ、一寸だけ擲ちよつとつてみたくなっただよ。 アンタが面白い
からか

反応するからついやり過ぎちゃってさあ」

予想以上に笑顔の種類バリエーションが多い。お化けは無表情で生命感が罔ないと言うのはどうやら私の偏見だったのかもしれない。

「アンタ、これから予定とかあるのかい？」

女が笑顔で私に問う。

予定などある訳がない。突然死んでしまっただけで今まで考えていた予定が総てなくなってしまうたぐらいた。寧ろこれから何をすれば良いのか全く判らない。

「いいえ…」

そう答えるしかなかった。

「そりゃ良かった。じゃあついておいでよ」

「どこへです？」

「妾の秘密の場所さ。大丈夫だって、取って喰ったりなんかしないよ」

女はそう言うふわりと宙に躰を浮かべた。そのまま見えない揺ゆり籠かごに揺られるように躰を横にする彼女は実に幽霊らしい。

「あ、あのあなたは…」

「ああ、そう言えば名前も教えてなかったね。妾は…」
くるりと身を翻ひるがえして背を向け、女はひなきと名乗った。

私は案内されるがままにひなきと名乗った女の秘密の場所とやらにやって来た。

遠い。

実に遠かった。

それは町外れの小高い丘の上にあった。曇っていた空もいつの間にか晴れ間が見えている。そんな事にも気付かない程、私は疲れていた。

「ほら、着いたよ。あらあら、随分とバテてるじゃない」

ひなきは風に揺られる蒲公英たんぽぽの綿毛ようにふわふわと宙に漂っていたが私はそんな彼女を息も絶え絶えになりながら走って追いかけて

ていた。だから当り前のように疲れていた。

彼女は丘の上にぼつりと一件だけ佇んでいる小さな廃屋の前で止まったかと思うと再びふわりと浮かび上がり、その瓦屋根の上にちょこんと座った。

「さあ、アンタも上っておいでよ」

屋根の縁に腰掛けてスカートから覗く足をぶらぶらと揺すりながら私に穏やかな笑みを浮かべるひなきは無茶な事を言い出した。

登ると言ってもどうすれば良いのだろう。

ほら早くしなよ、とひなきは手招きしている。

「ちよつと…そんな事言われても…」

私がそう弱音を吐くとひなきは呆れたような顔をしてこめかみを掻いた。

「やつぱり解ってないんだね、流石は死にたてはやほやのお譲ちゃんだ。アンタ歩き方は解るだろ？それとよく似たもんさ、先ずは一歩で良いから上に歩こうとしてみな」

怪訝に思いながらも言われた通り私は階段でも登るつもりで何も無い空中に右足を踏み出した。すると足の裏に柔らかな蒲団ふとんのような感触があった。まるでそこに見えない床があるようだ。

不安定だが…乗れそうだ。

「そうそう、その調子さ」

そんな私の姿を眺めながらひなきは実に楽しげにうんうんと頷いている。

両手を広げて均衡バランスを取りながら左足も前に踏み出す。足元にふわりとした感触が伝わった。ゆっくりと足元を見ると私の足の裏と地面との間に三十センチ程の間が開いていた。私は今、宙に浮いている。

「良いよ、じゃあそのままここまで上がっておいで」

私は一歩、また一歩と宙に足を持ち上げて行った。階段を上るように、否、そんな良いものではない、新雪の積もった雪山の不安定な傾斜を進むように辿々（たどたど）しい足取りでのしのしとひな

きのいる屋根の上まで這うように登っていった。

「やった。出来ましたよ」

「あはは、不ツ細工な浮かび方だねえ、全く。それじゃあ飛んでるとも言えないよ」

まあその内慣れて来るけどね…と結んだ。

「そんな事よりほら、こつちに座って見てみなよ。良い眺めだろ？」
ひなきに促されるままに瓦屋根に腰を下ろした。

「凄いですね、町が全部見えるんですね。」

ここからは町を一望できた。私も長い間この町に住んでいたがこんな良い眺めを拝める場所があるなんて知らなかった。

燦々さんさんと輝く太陽が肌に照りつける。その陽射しを中和するかのように少し冷たいが心地良い風が頬を撫でる。風は木々や草花のどこか懐かしいような匂いを運んで来る。

…気持ち良い。

「ところでアンタ、名前は何て言うんだい？」

そう訊いてひなきは大きく背伸びをしながらそのまま仰向けに寝転んだ。

「繭子です。蚕の吐く糸の繭に子供の子って書きます」

「へえ、やっぱり最近の子は可愛い名前だね」

「えへへ、ありがと」

私も自分の名前を気に言っている。褒めて貰えるところとしても嬉しくなる。私は死んでから初めて笑った。

…最近の子？

その言い方が引つ掛かった。

ひなきも随分と若く見えるので、その表現はどこかおかしいように思える。

「ひなきさんはいつもここにいますか？」

「まあ、大概ここにいるね。眺めも良いし風も気持ち良いからね」

「へええ、ところでこの家って見た感じですけど誰も住んでいないんですよね？」

それはどう見ても廃屋と言うべき佇まいだった。

小ぢんまりした平屋建てのやや古風な和風建築。長い間、人の手が加わっていないらしく土壁は朽ちて剥がれ落ち骨組みが露出しているところもあるし、屋根も所々瓦が割れていてその間から雑草が芽吹いていたりする。その檻襖ぼし檻襖ぼしの屋根は乗っているのが私達のようなお化けでもなければ底が抜けてしまいそうな程に頼りない。主がいなくなつて一年や二年というものではなさそうだ。

「まあ、今はね…」

少し間を置いてひなきが言った。

今は…？

何か知っているようだ。

…ひなきはこの家に何か関わりがあるのだろうか。

「ここって誰の家だったんですか？」

私がそう質した途端にひなきの表情は僅かに曇つたように見えた。矢張り彼女はこの家について何か知っているのだろうか。

「秘密さ…」

「え…」

「もっと仲良くなつたらアンタにも教えてあげるよ」

そう言つてひなきは私に向かってにこりと笑つた。しかしその笑顔はどこか無理矢理作つたような印象を受けた。

「そんな事より妾達の事を教えてあげる」

「私達つて？」

「妾達…お化けについて…さ」

そう言えば今の自分については解らない事だらけだ。

死んだら直ぐに閻魔大王の下で審判を受けて天国やら地獄やらへ行くものだと思つていたがどうやらそうではないらしい。現に未だ私はいつも通りの世界に留まっている。

「アンタ、ここまで来るのに疲れたかい？」

「はい…そりゃあれだけ走つたんですから」

そう答えるとひなきはくまたすくすと笑っている。本当によく笑

うお化けだ。

それにしても遠かった。

風に揺蕩たゆとうようにふわふわと浮かぶひなきを全力疾走で追い掛けて来たのだから…まるで飛ばされた風船を追いつけている気分だった。更にその距離は町の端から端までであり、極め付けに丘を駆け上がって来ている。巧い喩えたとではないがマラソン大会と遠足を同日に行ったようだ。

疲れない訳がない。

「あはは、やっぱり疲れたんだね。そんなの気の所為なのにさあ」
「気の所為…ですか？」

「そうさ。だって妾達には躰なんて罔いだろ？生きている時みたい
に馬鹿正直に走ったりするから疲れたと思うのさ」

言われてみればそうかもしれない。疲れたかと訊かれるまで
疲れている事すら忘れていた。長い距離を移動したので疲れたような
気がしていただけで實際躰には何の負担も掛かっていないようだ

これも所謂病は氣からという事なのだろう。

「それに屋根まで上る時に坂道…否、階段か何かを考えたのかい？」
その通りだ。

登ると言えば階段が最初に頭に浮かんだのだ。寧ろそれ以外は思
いつかなかった。

「それがいけないのさ。躰を使おうとすると時間がかかるよ…あ、
妾達は運動なんてしなくても太らないからそんなのは気にしないで良
いんだからね」

アンタは細いからもうちょっと太っても可愛いかもね、と嘯うそいて
ひなきは寝転んだまま相変わらず愉快そうに歯を見せて笑っている。
「じゃあどうすれば…」

「アンタらの時代の言葉を使えば『想像』イメージするのさ」
…アンタらの時代。

その口振りからすればひなきは矢張り今の時代とは違う時代の人
なのだろうか。確かに彼女は私と同じぐらいの齡のようなのだがど

こか昔つばい雰囲気を纏っている。

「イメージですか？」

「そう。想像さ。^{イメージ}妾なんかがこの屋根まで登る時は…そうだねえ。鳥かな、否、違ふなあ。例えば蒲公英の綿毛みたいな出来るだけ軽い物が風に乗るような想像をしてるねえ」

私を感じた印象と同じだった。

まあ直ぐに出来るようになるさ、とひなきはこの話を結んで眩しそうに目を細める。それから…と次の話に移ろうとした。

「多分アンタが思っている程お化けつてのは特別なもんじゃないんだよ。只、今まで見えなかっただけで割りとどこでもいるもんなのさ。道路にも駅にも喫茶店にも、何なら人の家にだって勝手に上がり込む奴もいるくらいだからねえ」

ひなきは悪戯っぽく、にやにやしている。

彼女も人の家を覗いたりしているのだろうか。現に今もこうして勝手に人の家の屋根で厚かましくも野良猫のようにごろごろしているのだ。彼女なら暇つぶし程度に人の家に入り込んで、それどころか見えない事を良い事に炬燵にでも入って寛いだりするかもしれない。この悪気のない快活な彼女の笑顔からそんな姿を想像するのは容易だった。

しかし今思えば少し怖いかもしれない。お化けがそこら中にいるのに今まで全く気が付かずに生活していたとは…。矢張り良く考えるところかなり怖いかもしれない。

私がそんな事を考えて眉を顰めたのに気が付いたのかひなきは、「お化けって言っても殆ど生きてる人間と本質は変わらないさ。妾らはそんな悪い奴ばかりじゃないよ」

と言いながら躰を起こして私の背中を軽く敲いた。

「大体みんな悪い印象を持ち過ぎなんだよ。お化けは祟るとか呪うとか好き勝手言っちゃってさあ。ところで繭子ちゃんさあ、アンタはこの世に怨みでもあるかい？」

私は首を横に振った。多少の未練はあるかもしれないが怨みなど

はない。

するとひなきは眉を吊り上げて顔を近づけて来た。

「そつだろ？なのに妾らはみんな患者扱いさ。非道い話だよねえ、まったく」

ひなきの口から次々と言葉が溢れ出して来る。本当によく喋るお化けだ。私は気押されて困ったように、はぁ、と気の抜けた相槌を打つ事ぐらいしか出来なかった。

「妾達みたいなお化けってのはね、滅多な事がない限りこの世に影響を与えたりは出来ないのさ。ほら、アンタ試しにそこに生えてる雑草に触ってごらんよ」

ひなきは片眉を上げて私の目の前にあつた青々とした草を指した。私は彼女の言う通りにその葉を抓んだ。

「どうだい？」

「どうと言われても…普通の草ですよ」

薄く笑ったままひなきは小さく頷いている。

「よし。じゃあその手の匂いを嗅いでみな」

「ええ？」

訝る私をひなきは良いから早くと急かす。彼女の意図も良く判らないまま指を鼻に当てた。

「うっ…。青臭いですよ」

苦そうに眉間に皺を寄せながら口を尖らせる私の顔が面白かったのかひなきはぷつと吹き出した。

「もう、ひなきさん！何なんですか？」

「ふふっ、ごめんよ。じゃあこれが最後だよ。その草を引き抜いてごらん」

相変わらず良く解らないが、とりあえず言う通りにしておこう。

私はその割れた瓦の隙間から生えている草をむんずと掴んだ。そして手に力を込めて一気に引っ張った。

「…あれ？」

手が滑ったらしい。

背の低いその雑草は全く変わらない姿でそこにあった。もう一度やってみたがこれがまた指の間からするりと滑るように草の感触が零れてしまい、手には青臭い匂いだけが残るだけだった。まるで魚でも掴んでいるようだ。

「おかしいなあ…」

「不思議だろ？」

ひなきは私の顔を覗き込みながらまた悪戯っぽく笑っている。

「最初にやった手触りと匂いに関しては生きている時の記憶を頼りにして感じる事は出来るのさ。でもね、この世に在る物を動かしたり壊したりは出来ないんだよ…言ったる？滅多な事がない限りこの世に影響を与える事は出来ないってさ」

よく理解できない。

この時、きつと私は顔全体で疑問符を表していたのだろう。ひなきは苦笑しながら付け足した。

「まあ話を纏めるとね、妾達お化けはこの世に在る物を見る、聴く、匂う、触る事は出来るんだけど相手はそれに全く気付かないし、相手の形を変えたりは出来ないって事かな。解るかい？…うーん、何て言うかね」

ひなきは難しそうな顔をして頭を掻き毟っている。実にじれったそうだ。

「そうだ。アンタらテレビっての見るんだろ？こっちからはテレビの中の人が見えるけどテレビの中の人からこっちは見えないだろ…それに似てるんじゃないかい？つまり別の世界から覗いてるような感じさ」

説明が上手いのか下手なのか良く解らなかったが、お化けの立場については何となく理解出来た気分にはなった。私は生きている人達からは見えない存在になった、そしてお化けと言うのは私が思っていた程怖いものではないと言う事だろう。

「何か、いまいち良く解らないって顔してるねえ…」

再び私の顔を覗きこんで少し不愉快そうな顔をしている。

「一口に言つとお化けはこの世から影響を受ける事は出来るけど、この世に影響を与える事は出来ないって事さ…つまり、んん…一方通行になつてゐるのさ」

彼女は自分の言つてゐる事を中途半端に理解されるのが嫌いな人間、否、お化けなのだろう。

「實際色々見た方が早いかな…よし、妾が今夜案内してあげる。それまでアンタはふわふわ浮かぶ練習でもしてなさいよ」

そう言つて彼女はまた猫のように瓦屋根の上に寝転んだ。

ひなきにああでもないこうでもないと言句を言われながら浮かぶ練習をしている内に陽が沈み、円い月が夜空に昇つてゐた。

「よし、そろそろ行こうかい」

銀色の月に照らされ、眠たそうに背伸びをするひなきのしなやかな体は妙に艶つぽくて女の私すら恍惚うつろする程に美しい。

「ん？何さ。妾の事じいつと視てさ」

私はその言葉ではつと我に返つた。

「えっ…いえ、何でもありませんよ！」

私はひなきの妖艶さの虜にされ…見惚れてゐた。彼女のきめ（…）の細かい白い肌は月の光を照らし返して朦朧ぼんやりと仄かな光を纏つてゐるように見える。

勿論、昼間見ていた時も美人だと思つてゐたのだが今の美しさは昼間の比ではない。

矢張り夜はお化けの時間なのだろう。

「着いておいでよ」

ひなきは綿毛のように体を宙に漂わせ町へ降りて行く。

「ちよつと、ひなきさん。待つて下さいよ」

果たして昼間よりは少しぐらひはましになつてゐるのだろうか…私は飛蝗ばったのようにぴょんぴょんと宙を跳ねながらひなきを追つて行つた。

空から見下ろす夜の町は妙に賑やかだった。

今まで見ていた町とは一風変わっている。

今まで見えなかった人達が見えるようになってる。

…私と同じ

…お化けだ

夜の町には勿論生きている人もいるのだが、大体のお化けは見た
だけでそうと解る。別に透けているとかそんな訳ではないのだが…
解る。まるで下手な合成映像のように不自然に風景から浮いている
のだ。ひなきがテレビの事を喩えに挙げたのも何となく納得出来た。
駅のターミナルでお喋りしているおばさん。

電気屋の店先でテレビを見ているおじさん。

私達と同じように屋根の上で猫と寝転ぶお姉さん。

映画館に顔をつっ込んで勝手に観ているお兄さん。

みんな私と同じお化けだ。

不意にひなきが止まった。

「どうしたんですか？」

ひなきは妙ににやにやしている。悪戯好きな少女の目だ。

「ほら、見てごらんよ。新鮮だろ？お化けの逢引デートつてのもさ」

男の子が居酒屋の前で足を怪我している女の子を自転車に乗るよ
うに勧めている姿を見つけた。初々しくて見ているこっちまでとき
どきしてくる。

「あれ？あの二人ってお化けですか？何かそんな風には見えないけ
ど…」

「あらあら、可愛いねえ…頑張れ坊や！」

ひなきが厭に熱くなっている。私の質問など聞こえていないらし
い。

「繭子ちゃん、もうちょっと近付いてみないかい？」

ひなきが厭に興奮している。鼻息が荒い。

「いやあ…そんなの悪いですよ。覗き見なんて」

「ああ、そうかい。じゃあ妾だけ見に行つて来るからアンタはここ
で待つてておくれ」

にやにや笑いながらひなきはするすると降りて行った。彼女は本当に楽しそうな顔をしていた。

私はお化けに対して偏見を持っていたようだ。よくよく考えるとみんな元々人間だったのだ。否、今でも人間だ。只死んだというだけで他は生きている人間と変わりない。

…怖くなんてない
…同じ人間なんだ。

私はふわりと仰向けになり濃紺の夜空に浮かぶ満月を見上げる。そして大きく息を吸うと清らかな夜の空気で肺が満たされていった。少しうとうとして瞼が重くなった。

「うわああ、繭子ちゃん。聞いておくれよ！」
顔を真つ赤にしたひなきが戻って来た。

「あ、ひなきさん。どうしたんですか？」

「あ、あ、あ、あの男の子…絶対本気だよ！しかも彼女も満更でもないって感じだしさあ」

「はあ…」

と、思わず私は溜め息を洩らした。

「もうちよつと見て来て良いかい？ほらほらほら、あの女の子たら何だかんだ言って彼の自転車の後ろに乗っちゃったじゃないかい！ああ、これからあの子たちは何処へ行くんだい」

ひなきの綺麗な顔が台無しだ。赤くなってぴいぴい騒ぐ彼女はまるで薬缶だ。

「ひなきさんったら、盗み聞きは悪いですよ…もうそつとしておいてあげましょうよ」

興奮したひなきを引きとめて私達はもう少し空中散歩を楽しむ事にした。

今までとは一味も二味も違う夜の町はとても魅力的でとても新鮮だった。本当に色んなお化けがいるものだ。

人通りの少ない町外れの薄暗い路地の上で私はふと立ち止まった。

「んん？どうしたんだい、急に？」

サラリーマン風の背広を着た男の人が一人歩いている。その男は確りと風景に馴染んでいる。つまりあの人は生きている人間なのだろう。

それとは別にもう一人電信柱の陰にいる。

そちらは明らかに生きている人とは違う… と言って他のお化けとも何かが違う。

… あれは何だろう。

それは全体的に黒に近い灰色がかった色をしていて、軀が溶け出し、^{ただ}いるように爛れている。顔もどろどろと渦を巻くように変形していて、辛うじて人の形を留めていると言った具合だ。

その顔であろう部分には二つの白く冷たい光がある… 眼だろうか。兎に角、今まで見たお化けとは全く違う。その鬼魅^{きみ}の悪い何かは、^{とかげ}蜥蜴のように音も無く地面を這い、背広の男の後に着いて行こうとする。

「あれもお化けですか？」

私は訝りながらそれを指差した。

「駄目！隠れて！」

突然ひなきは声を荒げて私の腕を乱暴に掴んだかと思うと、そのままビルの陰に引き摺り込んだ。

何が無だか良く解らなかった。

「あれは何なんですか？」

「… 見つかったちゃあ… いけないよ…」

いつになく真剣な顔をしたひなきは私の腕を確りと握ったまま離そうとしない。その手は小刻みに震えている。

「あの男… 近い内に死ぬよ」

「死ぬって… 背広の人がですか」

「ああ、そうさ… 殺されるんだ」

ひなきの息が乱れている。取り乱しているようだ。厭な物見ちまつたよ、とひなきは冷や汗を手の甲で拭っている。

彼女の不安は私にもじわじわと伝染した。

「どうしたんですか…」

「アンタも見ただろ？」

「見たって…あのどろどろのお化けですか？」

ああそうさ、とひなきは声を潜めながら答えた。

「昼間、お化けは滅多な事がない限りこの世のものに影響を与えられないって説明したろ？あれはその滅多な事がある（・・・）奴さ」

所謂…と随分溜めた後彼女は重々しい口振りで呟いた。

「悪霊…ってやつさ」

厭に聞き覚えのある単語だった。

その悪霊という存在は私達と同じお化けでありながらその中でも異質な存在であり私達のような普通のお化け達からも避けられているらしい。確かに見た目も他のお化けとは全く違っていて全身から禍々しい妖気のようなものを放っているようだった。どうも友達になれそうな具合ではない。

少し気になったので恐る恐るビルの陰から顔だけを覗かせて悪霊の方を見た。

その時、私は齒の裏の辺りまでよじ登って来た悲鳴を無理矢理押さえるように口に手を当てた。寧ろ許されるなら叫んでしまいたかった。

悪霊は背広の男の背中に負ぶさるようにしがみ付いていた。一方で男は全く気付く様子もない。

そしてその悪霊は…

…笑っていた。

ケタケタケタ。

悪霊は下品に笑っている。

流石に気持ち悪くなった私は再びビルの陰に身を隠した。それでも悪霊のけたたましく、そして禍々しい笑い声が鼓膜に刺さる。

耳が…頭が…胸が痛い。

やがてその不吉な声は遠く離れて行った。

きつとあの男に着いて行ってしまったのだ。ひなきの言う事が確かならばあの男は死ぬ、悪霊にとり殺されてしまうのだ。知らない人だとは言え、殺されると知っていて何もしてやれなかったのは少し後生が悪かった。

「悪霊には関わっちゃいけないよ…絶対に」

念を押すように静かに、それでいて力強く諫めるひなきは青い顔をしている。いつも快活な彼女が初めて見せる顔だった。

「そ、そんなに危ないんですか…悪霊って言うのは」

ひなきは小さく頷く。

「妾らお化けってのは駄が無いだろ？つまり心だけの存在さ。妾もアンタも心が安定してるから今の形をしていられるんだ」

私の腕を握ったままのひなきの手は汗でじっとり濡れている。

相当取り乱しているように思えた。…でもね。とひなきが続ける。

「上手く説明出来ないけど例えば、怒りとか悲しみとかで頭がいはいになっちまうと心だけの存在のお化けは…形が崩れるのさ。さっきのアイツみたいにね」

そう言ってひなきは悪霊が去って行った方向を視線で示した。

「ああなってしまうともう駄目さ。お化けじゃなくて徒の怨みの念そのもの…感情も良心も理性もあったもんじゃないよ。アイツら悪霊ってのは怨みを晴らす為だけにこの世を彷徨う…化け物さ」

化け物…。

お化けも化け物も意味としては大差無いように思えるのだが感覚では化け物の方が遙かにおぞましい。

「あれに関わると碌な事ないよ、目を合わせるだけでも瘴氣に当たられて頭が狂しくなっちまいそうさ」

厭なもん見ちゃったよ、とひなきは自らの肩を摩っている。

…怨みの念そのもの

…怨みを晴らす

…化け物

…悪霊

私の脳裡に一つの疑問が過った。

「あの、じゃあ悪霊は… 怨みを晴らせば私達みたいな普通のお化けに戻るんですか？」

「そんな訳無いじゃないか」

ひなきは即座に否定する。

「え？」

「あいつらは怨みや悲しみしかないんだよ。それだけで存在してるんだよ。それが総てなんだよ。それが罔^なくなったらどうなるか解らないかい？ 想像出来ないかい？」

ひなきは語気を強めて矢継ぎ早に言った。

「どう… なるんです？」

私にはいまいち想像が付かなかった。生きている時、テレビや雑誌で怨霊や悪霊と言った言葉を目に耳にした事は勿論あった。そのような怪談や都市伝説も知っている。

しかし怨みを晴らした悪霊のその後は… 知らない。生きている者の目線では解らなかった、否、それどころか考えてもみなかった。するとひなきは何も答えないままふわふわと宙に浮かび上がる。

「ひなきさん、待って下さい！」

私もビルの壁を蹴って宙に跳び上がりひなきの後を追った。

ひなきは鈍感な私に厭気が差したのだろうか。そう思っていた矢先に彼女はくるりと身を翻して後に続く私を見降ろして僅かに口元を綻ばせた。

「まあ… アンタも一度見たら解るよ」

「何をですか？」

宙を泳ぐ魚のようにひなきはすいすいと銀色の月に向かって登って行く。その姿は人魚のようだった。

「悪霊になった奴の末路さ」

ひなきは月を背に立ち止まった。

ちらりと私の方を振り向いた彼女は本当に月がよく似合う。しかし確かに美しくはあるがどこか悲しげな顔をしている。きっと彼女

は見てきたのだろう、厭になる程沢山の悪霊の最期を。そしてそれは決して後味の良いものではないのだろう。

総ては彼女の物憂げな面持ちがそう語っている。

「ところで…アンタこれからどうするんだい？」

「どうする…って？」

意外な言葉だった。

「別に何も予定はありませんけど…」

ある筈など無い。

「じゃあちよつと一人で色々散歩しておいでよ」

…一人で？

「え、ひなきさんは？」

「妾かい？妾はちよつと用事があるのさ…」

「もしかして…彼氏ですか？」

「ば、莫迦^{ばか}言^たつてんじゃないよ。徒^{ただ}の探し物さ！」

その雰囲気から私が関わるべき事ではない事は何となく察する事が出来た。きつとひなきだけの問題なのだろう。寧ろ私は首を突っ込んではいけない。

「妾もその内帰るからアンタも散歩に飽きたら帰っておいでよ」

「帰るって…どこへですか？」

「決まってるだろ、あの屋根の上だよ！」

そう言い放つてひなきは風に吹かれるように夜の町へと降りて行った。

妾も直ぐに帰るからアンタもあんまり遅くまでぶらぶらしてるんじゃないよ、と彼女の声が無処かから響いて来る。

「わかりましたよ」

思わず口元が緩んだ。

まるで母親か姉のような口振りだ。ひなきはさばさばして淡泊なように見えて実はかなりの世話焼きなのだろう。

私も風に身を委ねる。

本当に何もやる事が無いので彼女の言葉通り浮かぶ練習も兼ねて一人で空中散歩でも楽しんでみよう。

静かに目を瞑り、仰向けになる。すると風はふかふかの毛布のように私の躰を優しく支えてくれる。

なるほど、浮かぶ事は何となく解ったような気がする。風の気紛れな案内を受けて私も町へと流されて行った。

―アンタも散歩に飽きたら帰っておいでよ

―決まってるだろ、あの屋根の上だよ！

ふとひなきの言葉を思い出すと胸が温かくなる。

今の私にも帰る場所があるのだと思うと嬉しかった。

死んでしまった私には本来もうこの世に居場所など無いのだ。家へ帰っても家族は誰も私に気付いてくれないだろう。親友の美妃だつてきつと気付いてくれない。私は永遠に独りぼちになつてしまう筈だった。

最初にひなきが私の前に現れた時は腰が抜けそうになる程怖かったが今思うと彼女はとても頼りになる存在だ。

ひなきがいなければ…

…私は独りぼちだった。

帰る場所があると随分安心出来る。

…私は。

…独りではない。

私は気儘きままに夜空を漂い、いつもと違う夜の町を散歩している。否、

町はいつもと同じなのだろう。

いつもと違うのは…

…私の方だ。

視点が変わるところも違って見えるものなのかと豪く感心した。

十分に夜の町を満喫した後、私はするするとより高い空へと浮かび上がる。濃紺の空に浮かぶあの月を目指すつもりで出来る限り高

い所に行こうとした。やがて町の喧騒も届かなくなるぐらいの高さまでやって来るとそこで大きく背伸びをする。

…気持ち良い。

天女にでもなった気分だ。

そこには何の音も無い。静かだ。ふと足元を見ると遙か下の方で町の灯りが星空のように輝いている。上を見ると本物の星空がある。上も星空、下も星空…不思議な気分だ。

「ちっちゃいなあ…」

と、私は思わずぼそりと独り言を洩らした。

足元の星空は随分と小さい。今までずっとその小さな星空の中で生活していたのかと思うと何か複雑な気分になる。

私は躰を仰け反らせて、そのまま空中で逆立ちをした。すると足元に銀色の月が輝き、頭上に小さな星空が広がった。

ひゅうと鋭い音を立てて強い風が吹き抜けた。

「ジェットコースター…だよ」

また独り言を呟いて私はにこりと笑う。

そして全身の力を抜いて小さな星空に落ちてゆく。

どこまでも、どこまでも…落ちてゆく。

死んで一日目の夜は十分過ぎる程に楽しめた。

私は満足げにふわふわとひなきとの待ち合わせの廃屋へと帰って来た。振り返ると相変わらず町は星空のように輝いている。しかしその星の数はさっきより減っているようだ。どうやらもう、夜も随分更けてきたようだ。

小高い丘の上にあるこの廃屋は人々から忘れ去られてしまったかのように寂しく佇んでいる。この場所そのものが私達お化けと同じように別の世界から切り取られてきたように不自然に浮いている。

まるでこの空間だけこの世界とは無関係で時間すら流れていないようだ。

「ただいま！」

屋根に向かってそう言ってみたものの返事は返って来ない。

「ひなきさん、繭子です！今帰りましたよ」

ふわりと躰を浮かべ、雑草の生えた屋根の上を覗き込んでみたが誰の気配もない。どうやらひなきは未だ戻って来ていないようだ。

…それにしても古い建物だ。

改めて物珍しく思い、私はその小さな廃屋の周りをぐるりと一周回ってみる事にした。

剥がれた土壁。

割れた屋根瓦。

罅^{ひび}の入った硝子窓。

赤く錆びた窓枠。

蜘蛛の巣だらけの軒。

腐りかけた骨組み。

その外観は夜に見ると暗さの所為もあり、昼間に見た時よりもどこか鬼魅が悪く思える。

これも夜の魔力だろうか。

…まるでお化け屋敷だ。

実際屋根にいつも猫のように丸くなった本物のお化けがごろごろと寝転んでいるのだからお化け屋敷と形容するのも強^{あなが}ち間違いではないだろう。

私は廃屋の周りを一周し、再び玄関の前に戻って来た。

建物に関する知識には決して明るくはないが素人目に見てもこの建物が人の手を離れて数十年は経っている事が判る。もしかすると人が住んでいたのは五十年以上前かもしれない。

そう思える程その廃屋は荒れて、傷んで、腐って、朽ちていて、倒壊せずに形を保っている事すら奇跡のように窺える。

扉の外れた玄関から暗闇がぼっかり口を開けている。月明かりが

手伝って入口の土間だけが僅かに青白く照らされているがその先は完全な闇が支配していて中の様子を窺う事は出来ない。

私は何かに引き寄せられるように玄関に近付いて行く。

玄関先の左の壁には手のひら大程の大きさの長方形の白い跡がある事に気付いた。恐らく表札が架かっていた跡なのだろうが今はもう何もない。それが表札の跡だったとするとここは矢張り民家だったのだろうか、そうだとすると嘗て誰かが住んでいたと言う事になる。

それにしても一体誰が…。

玄関口の真正面に立つ。

すると中から湿った黴臭^{かび}い空氣が流れ出してくる。私はごくりと唾を飲み込み、意を決して敷居を跨いだ。

じつとりとした湿氣が私を包み込む。

そこは別世界だった。とても家の中とは思えない黴と土と植物の匂いが充満している。予想はしていたが矢張り人が住めるような状態ではなさそうだ。

奥の方は暗くて何も見えない。

この先には光も音も罔い…

…深海だ。

私の足は敷居を跨いだ所でぴたりと止まってしまい、それ以上進めなくなった。真つ暗な室内にはどうしても上がる気にはなれないのだ。何となく触れた木造の壁もひんやりとした水氣を含んでいて何処か不潔な印象も受けた。

不意に視線を玄関の右側に送ると何かが私の視界に飛び込んできた。

…箱？

私の胸の高さ程もある箱がある。

しかしそれは長い年月に晒されて腐り、植物の蔓^{つる}が巻き付き、今にも朽ち果てようとしていた。

よく見るとそれは棚のように段があるようだ。

…下駄箱かな？

多分そうなのだろう。

蔓と葉の間から幾つか靴が残っているのが見える。生活の跡を見つけると妙に生々しい感じがした。どれも男物の革靴のようだ。

昔…ここに住んでいたのは

…男の人？

その朽ち果てかけた靴は大きさも総て同じようなもので、数もそれ程多くもない。どれも同じ人物の靴かもしれない。他の家族などの物は無さそうだ。

ひなきは何か知っているのだろうか…。

昼間の態度からすると何かは知っていそうだった。しかし彼女は何も教えてくれないだろう。そしてこの家の過去など私にはきつと関係の無い事なのだろう。

天井を見上げてふうと息を吐いた。

……。

私は息を吐き切ったまま固まってしまった。

私の右肩に冷たい何かが乗せられた。

恐る恐る、ゆっくりと視線を肩へと這わせてゆく。私は大きく目を見開き、肩に乗っているそれを見て全身の毛が弥立った。

白い手が置かれている。

「…繭子ちゃん」

頭の後ろで囁くような声が聞こえる。

風鈴のように涼しげで、そして小さな声。

名前を呼ばれた私は小さな悲鳴を上げて竦み上がった。

「何…やってんだい？」

声のする背後をちらりと見ると、困ったような顔をしたひなきが立っている。

「ひ、ひなき…さん」

私は目を瞬かせながらひなきを凝視している。そんな私をひなきは不思議そうに凝視てからまたいつものように微笑んだ。

「ごめんよ、ちょっと遅くなっちゃったよ。さあ、屋根に上って星でも眺めようかい」

そう言ってひなきは踵を返して敷居を跨ぎ外に出た。私は未だ足が竦んで動けないでいた。ほら、さっさと行くよ、とひなきは手招きして催促する。

それでも私の足は未だ震えている。

「ひなきさん…この家って…」

私が最後まで言い切る前にその言葉は遮られた。

「もうこの中は…見ないでくれ」

ひなきは背中を向けたままそう言い放った。

ふと、総ての音が止んだ。

静かで優しい言い方だった。が力強いその声に気押されて私は押し黙ってしまった。矢張りひなきは何か知っているらしい。しかし私には彼女にそれについて質す事は出来なかった。

そのまま私達は暫く黙ったまま凝としていた。その時の彼女の背中では随分と小さく見えた。夜よりも黒いひなきの髪がはらりと風に揺れて靡く。

ひなきの言葉が頭の中で何度も再生される。

仄かに悲しみと寂しさを含んでいるような彼女の声がどうしても忘れられない。

ここ数日は晴天続きだったのが今日は打って変わってしとしとと雨が降っている。

夏の集中豪雨とは違って秋の雨はじわじわと降ってなかなか止まない。恐らくこの雨も今日一日は降り続けるのだろう。

そしてこの雨が止めば、冬がやって来てしまふのだろう。

…何となくそんな気がする。

分厚い雲に覆われた灰色の空の下、町外れの寺の境内に集まった人々の表情も空と同じように曇っている。

「アンタ、友達多いんだね…」

しつとりと濡れているような声。

境内に植わっている紅葉の枝にちょこんと腰掛けているひなきは神妙な面持ちで静かにそう呟いた。

葬儀に参列する人々は皆一様に黒い服を着て暗い顔をして故人を悼んでいる。本当にどこを見ても白と黒しか色がない。そして空はその二色を混ぜ合わせた灰色。鬱々とした気分になってしまいそうだ。

そんな中で紅葉の葉だけが鮮やかな紅を主張している。しかしその紅も雨に打たれて次々に散ってゆく。

愈々気が滅入ってしまいそうだ。

この抹香臭い厳粛で重々しい雰囲気はどうしても好きになれない。耳を澄ませば人々のすすり泣く悲しい声も聞こえてくる。

矢張り葬式は厭だ。

その日、小さな寺でしめやかに葬儀が執り行われている…

…私の葬儀が。

辛気臭い雰囲気を感じ出している堂内を覗くと、見覚えのある顔が沢山あった。

父、母、親戚の叔母さん、叔父さん、それに久しく会っていないかった友達も来てくれている。このまま同窓会でもしたい気分になる。しかし皆、祭壇に飾られた私の遺影に向かって沈んだ顔をしている。「もっと可愛い写真…なかったのかなあ…」

「あらあら、アンタも呑気なもんだね」

全く我ながらその通りだと思った。

…呑気なものだ。

皆は悲しんでくれているのだろうか当の私はそれ程悲しく思っ

はいない。寧ろ悲しませて申し訳ないような気がしているぐらいだ。線香の匂いが鼻を衝いて思わずくしゃみをする。

まさか今日の主役である私が斎場に来ているとは誰も想像すらしていないだろう。私はずかずかと祭壇に近寄り供え物を物色する。

「わぁ、苺」

私の好物である季節外れの苺がこれでもかと言う程に盛られていた。

「苺が好きなのかい？」

「うん、大好きなんです。でも、これって……」

そう言いかけるとひなきは苦笑しながら首肯する。矢張り今の私には食べられないらしい。

厳粛な葬儀の途中で小鳥のように騒がしく喋るのは罰当たりなように思えるがよく考えてみるとその場合は私が罰を当てる側なのだ。そう思うと本当に妙な気分だ。私は指を銜えて恨めしそうに苺の山を見て唸っている。

「アンタさ……よくそんな呑気にしていられるね」

「え？」

「莫迦だねえ、後ろを見てみなよ」

いつになく真面目なひなきの声。私は何気なく後を振り返ると緩んでいた表情が一気に引き攣った。

母が、父が、皆が泣いている。

……誰の為に？

私の為に泣いてくれているのだろうか。否、私の所為で泣いているのだ。私の所為で悲しんでいるのだ。

「解るだろ？」

そう言っただけひなきが私の肩に手を置いて諫める。

「死んだ方は悲しくなかったとしても残された方は悲しいのさ。特にアンタなんかは皆から好かれていたみたいだしねえ。羨ましいくらいだよ、全く……」

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

…私は、本当に…

…馬鹿だ。

やがて葬儀は終わりを迎えて私の躰との別れの時間がやって来た。祭壇から私の入った棺桶が運び出され霊柩車に乗せられる。曇り空の下、皆はそれを涙ながらに見送ってくれていた。私とひなきも寺の屋根に腰掛けてそれを見送っている。

雨は相も変わらず、しとしとと降っている。

「どうだい、自分の葬式を見た気分は？」

「複雑な気分…です」

「だろうねえ…」

私は朦朧^{ぼんやり}と境内に散らばった人々を眺めている。私がいなくなった事を惜しみ、悼んでくれる人がこれ程いたと言う事が嬉しかった。

…ありがとう、それから

…悲しませて

…ごめんなさい

つい先程まで私達が立っていた紅葉の木の下に見覚えのある後姿を見つけた。その女は蹲^{うつすくま}りながら力無く項垂れている。私はふわふわとその女の元へ向かって行つた。そして顔を覗き込むと、思った通りそれは彼女だった。

…美妃^{みき}。

「その子、友達かい？」

音もなくひなきが私の傍らに現れた。

「はい、私の…親友です」

「そうかい…」

美妃はいつもの可愛い顔を台無しにしてしくしく泣いている。私の所為で泣いているのだ。そう思うと私も泣きそうになってしまう。本当に申し訳ない。

「美妃ちゃん…」

誰か男の人が美妃の名を呼んだ。すると美妃は名を呼ばれた事に

反応してゆつくりと泣き顔を上げた。

その声には聞き覚えがある。

とても安らぐ声だ。決して忘れる事のない声。私の胸が温かくなる。

声のする方を向いた時、私の胸はきゅうと締め付けられた。

男は傘も差さずに立っている。

「どうしたんだい、知り合い？」

ひなきが不思議そうに訊いてくる。私は暫く間を置いてからうんと答えた。

私は彼を凝視^{みつめ}たまま動けなくなった。

背中が冷たい。

歯茎がうずうずする。

舌の上がからからに乾く。

胸がきりきりと痛む。

…彼は

「この人は…私の…」

声が震えて上手く喋れない。

…世界で一番大切な人。

…翔^{うや}。

ひなきも何となく察してくれたようで、一步後ろに退いて紅葉の幹に凭れかかった。そしてそれ以上は私に何も訊かなかった。

私は泣き叫びなくなる程に悲しくなった。もしここにひなきがいなければその場でたたき回って泣いていたかもしれない。

「この人は…翔は…私の婚約者…だったんです」

私は独り言のようにそう呟いた。しかしひなきは気まずそうに俯いたまま口を閉ざしている。勿論、私の声は生きている人である美妃や翔には全く聞こえていないようだ。

悲しい。

こんなに近くにいるのに、こんなにも隔たってしまったている。

つい数日前まではこれから先の人生を永遠に共にする誓いを立て

ていた筈なのに、今はこんなにも隔たってしまったている。

「翔…翔…たら！」

悲しみに弾かれたように私は翔の目の前に飛び出した。目と鼻の先に雨に濡れた寂しげな翔の顔がある。しかし翔は目の前にいる私の遥か先に視線を向けているようだ。

つまり…

…翔は私を見てくれてはいない。

本当に写真やテレビに話しかけているようだ。

「ねえ。翔…」

鼻の奥の方がつんと痛む、我慢していた涙が瞳の裏側からじわじわと湧き出してきているのが分かる。

寂しさと愛おしさで堪らなくなった私は翔の肩を乱暴に掴んで駄々を捏ねる子供のように喚き散らした。

「私よ、繭子よ！翔…お願い。私を見てよお！」

翔の肩はしつとりと雨に濡れている…ようだった。私はそのまま翔に躰を預けるようにして俯き歯を食い縛る。

悲しい。

そして何より、やるせない。

「ねえ、返事…してよ」

それは懇願、否、哀願だった。

次の瞬間、耐えられないぐらい辛い事が起きた。

翔が一步前に踏み出す。すると、彼は私の躰を煙のように透き抜けて私の目の前からいなくなっていた。本当に煙のように。

…違う。翔が煙なのではない。

…煙は、私だ。

この世界での私の存在は徒^{ただ}の立体映像のように質量がなく頼りない。私にはこの世界が見えているが、この世界に私は存在しない。

…私はこの世界に関われない。

全身の力を失い、その場に倒れ込みそうになった。

ふらふらとよろめく私をすかさずひなきが支えてくれた。お化け

である彼女には私も触れる事が出来る。悲しい事実だが、今はひな
きの存在が嬉しい。

「よしよし…辛かったね…」

ひなきは私の頭をさすり優しく臍を抱きかかえてくれた。

「は、はい…」

私は鼻を吸りながら返事をしたが泣くのは我慢しようとして
いた。もう少し、翔の姿を見ていたかったのだ。

翔は蹲る美妃の元へと真っ直ぐ近付いて行く。そして彼女の横で
屈み込んだ。

「翔君…」

美妃はふと泣き止んだ。

ちよつと待つてよ、とひなきが間に入る。

「あの二人って知り合いなのかい？」

私は小さく首肯する。

「うん、私と美妃と翔は学生の時からの友達なんです。今でも時々
三人で会ったりするんですよ。いえ…会ったりしてた（・・・）ん
です…」

自分で言い直して余計に切なくなつた。もう三人でお出かけした
り、ご飯を食べたり、お喋りしたりする事も出来ないのだ。

ふうん、とひなきは納得したように頷いている。

一方で美妃は翔を見てビー玉のように目を丸くしていたかと思う
と今度は安心したように再びわんわん泣き出した。

「ごめんなさい、翔君…わたし、わたし…」

美妃は私が死ぬ瞬間に一緒にいた事に事故とはいえ責任を感じて
いるらしい。

何となくその気持ちも解らないでもない。もし逆にあの時、車輪
の下敷になっていたのが美妃だったとしたら私も同じように感じて
いただろう。例えばそれが私にはどうしようもない事だったのだとし
ても。

「美紀ちゃん…そんなに泣かないであげようよ」

「え？」

美妃は訝しげに首を傾げた。

同じように私とひなきも同時に首を傾げた。

「繭子が見たら悲しむだろ…だから僕らは我慢しなきゃ」

私はと胸を衝かれた。

翔は私の考えている事をお見通しなのだ。彼の言う通り美妃の泣いている姿を見ていると申し訳ない気がして私まで泣きそうになっていた。

美妃は嗚咽を堪えて歯を食い縛っている。ぎりぎりと歯が擦れる音が聞こえて来そうな程だ。

「そういう僕だって本当は泣きたいんだけどね」

翔は口元をぎこちなく綻ばせる。どうやら彼は無理に笑っているようだ。その証拠に唇が小刻みに震えている。

「でも世界にはね、葬式の時に皆で大笑いする所もあるんだよ。最後は笑顔で見送ろうって考えでね。そこまでは言わないけどせめて僕らも泣かないでいようよ…繭子はそんなしんみりした事は好きじゃないだろ」

そう言つて翔は慰めるように美妃の肩に手を置いた。本当に翔は誰にでも優しい。私はそんな彼が大好き。自慢の彼氏だ。

「それに君が悪いなんて誰も思っちゃいないよ。だからごめんだなんて言わないで」

「でも…わたし…」

「美妃ちゃんはその時どうする事も出来なかったろ、あれは事故なんだから…お願いだから後ろ向きにはならないで」

繭子の為にも、と翔は結んだ。

「アンタ…本当に愛されてるんだね」

傍らで一部始終を見ていたひなきはそう言つて私の頭を撫でる。

そして美妃は弾かれたように翔の胸に飛び込んだ。そしてまるで子供のように泣き喚いていた。

翔は少し困った顔をしながらも

「うん、繭子の事で泣くのもこれで最後にしてあげようね」

と、優しく囁く。そして彼は美妃の華奢な^{きやしや}軀を優しく抱き寄せた。私は茫然とそれを凝視^{みつめ}しているだけだった。

私の親友の美妃と、私の婚約者の翔が恋人のように密着している。
豪^{えら}く複雑な気分だった。

「羨ましいよ、本当にいい男だね…アンタの婚約者は」

そう。ひなきの言う通り翔は本当に優しい男^{ひと}。何故なら私がこの世で唯一愛した男^{ひと}なのだから。

だからこそ…

…だからこそ翔には幸せに生きて欲しい。私の事を引き摺ったまま生きて欲しくない。私の事なんかは時々思い出してくれればそれで良い。

私はもう…過去の人。

例えばそう思われたとしても翔が幸せに生きてくれるのならばそれでも良い。

翔の枷^{かせ}にはなりたくない。

翔の檻^{かぎ}にはなりたくない。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。もう良いだろう？」

ほら、行くよ、と言ってひなきは静かに宙に舞うように浮かび上がる。私も軽く頷いてから彼女の後に続いた。愛想の無さそうな口調でひなきはそう言ったがきつと私の複雑な気持ちを酌んでくれたのだろう。

寄り添い合う翔と美妃の姿がどんどん小さくなる。

…私は、二人に感謝してるからね。

…心配してくれてありがとう。

私は二人に背を向けた。

どんよりとした空の下でひなきが大きく背伸びをする。

「じゃあ、妾はちよつと探し物に行つて来るからね」

…まただ。

また探し物だ。

私がひなきに出会ってから彼女は毎日欠かさずに探し物とやらに出かける。その間、私は非道く退屈するから少し厭だ。恥ずかしながら正直な気持ちを言つと…ひなきがない時間は寂しい。

「直ぐに帰るからアンタはいつもの屋根で先にごろごろしてなよ！」
そう言い残してひなきは町の方へと消えて行つた。

…本当に自由な人だなあ。

私は少しひなきが羨ましかった。否、正確に言つと憧れているのかもしれない。彼女の何事にも囚われない自由な鳥のような心がとても魅力的だった。

そんな彼女を真似して私も自由にこの世を今日も散歩しようと思を預ける為、風の流れを探った。

目を閉じる。

・・・。

何かが私の邪魔をする。

…呻き^{うめ}声か。

首筋に冷たいものが這い上がり、鬼魅が悪くて気持ちを掻き乱される。

「今の声は…」

聞き覚えがある。否、この感覚を味わった覚えがあるのだ。

ふとその呻き声が聞こえた方向に目を向ける。私はぎよつとして口元に手を遣り、息を飲んだ。

大型のトラックが車道の真ん中に停まっている。それだけでは特に問題はない。その直ぐ先で血塗れの男が横たわっている。骨がばらばらになってしまったかのように手足は不自然に捻じ曲がり、ぴくりとも動く様子もない。

…多分

…死んでいる。

…交通事故か。

そう納得しかけたがその男の顔を確認した刹那、私は震え上がった。

た。

… あれは

… こないだ悪霊に負ぶさられていた

… とり憑かれてい人だ。

その恐らく死んでいるだろう男の傍らにあの悪霊がすうと現れる。

悪霊は満足げに男を見下ろしてケタケタと笑っている。

… 耳が痛い。

その笑い声は硝子を擦り合わせる音のように吐気がする程に頭に響く。しかしその悪霊は実に満足げだ。悪霊は怨念を晴らしたのだ。しかし私に一つの疑問が過る。

… 目的を果たした悪霊はどうなるのだろうか？

私達お化けは念だけの存在で、悪霊は怨みの念だけでその場に存在している。と、ひなきは言っていた。

怨みの念だけで…。

では怨みの念が罔くなってしまうと悪霊はいったいどうなってしまうのだろうか。

その答えは直ぐに解った。

血塗れで横たわる男を見降ろしながら禍々しくも愉快そうに笑う悪霊は、やがて苦しそうに呻き出した。

アア、アアア…。

その声はとても悲しそうだ。唯一の目的を達成してしまい自分の存在意義を失った事に気が付いてしまったのだろうか。

全身の毛が弥立つ程に恐ろしく、鬼魅悪く、そして…

… 可哀想だった。

アア…。

悪霊はそんな弱々しい啼き声を上げてぴくりとも動かなくなった。するとその爛れた皮膚が次第に乾燥した泥ように固まって、やがて細かな罅^{ひび}が入り出した。そして風に吹かれてぱりぱりと悪霊の軀は消えて行く。

アアアアアアアアアアア…。

男とも女ともつかない化け物の絶望的な断末魔の声。

気持ち悪くて全身の毛が逆立つ。

これは悪霊の悲鳴なのだ、慟哭^{とうきう}なのだ。

目的を果たしこの世に繋ぎ止められるものがなくなってその身が消滅してしまうのだ。念だけで存在を留めている私達お化けはその念が霧消してしまうと存在すら消えてしまう。

一頻^{ひとしき}り喚いた後、その悪霊は跡形もなく消え去っていった。

その声は暫く耳に染み付いていた。

かなしいひとりごと

まゆこ
繭子が死んだ事。

信じられなかった、信じたくはなかった。しかし彼女の入った小さな箱の窓からその顔を見ると矢張り信じない訳にはいけなくなってしまった。

繭子は死んだのだ。

棺桶の窓から覗く彼女の寝顔は綺麗だった。いつもはしない化粧を施されて静かに目を閉じる彼女は人形のような可愛い顔をしていた。

…人形のような。

そう、人間には見えなかった。

狭苦しい棺桶にぎつしりと納められた繭子は、まるで硝子箱にぴつたりと納められた仏蘭西人形フランスのようにしおらしく安らかに美しくあった。本当にこの世のものではない程に美しかった。

本当に…

この世のものではない程に…。

透き通るように白い肌、仄かに紅い唇、艶やかな栗色の髪。今まで見てきた繭子の中でも今日の繭子は一番綺麗だった。

しかし、何かが足りない。

決定的な何かが。

最も大事な何かが。

人形にはなくて、人間にはあるもの。

…心。

それだ。

棺桶の中の繭子は綺麗だった。しかし彼女は抜け殻のようだった。彼女には人間として肝心の心が無かったのだ。

彼女を見たとき感じた自分との何とも言えない隔たりを思い出す

と喪失感で今にも泣きそうになる。

…僕と繭子はこんなにも近くににいるのに

…こんなにも隔たってしまったている。

胸が張り裂けそうだ。

いつその事、その胸が本当に張り裂けてしまえば、発狂こわれてしまえば楽になるのかとさえ思う。

箱の中で眠る繭子を覗いた時に鼻を掠めた儼かな線香の匂い、それから連想させられた冷たい死の香り…。

どうしてもそれを記憶から拭い去る事が出来ない。

…本当に。発狂こわれてしまいそうだ。

翔は部屋に帰って来るなり荷物をベッドに向かって乱暴に投げつけた。

悲しんでいるのか、苛立っているのか、自分でもよく解らない。
ヒステリック
臆躁的にわあと叫んで頭を掻き毟った。胸にかかる靄もやを振り払おうと叫んだが矢張り無駄だった。また直ぐに重く冷たい靄が胸を覆いだす。

葬式では涙を堪えていた。

…泣いてしまうと繭子が悲しむから。

美妃にも偉そうにそんな事を言った。そのときは美妃が見ていたから翔は泣かなかった。しかし一人になってしまつとどうだろう。

誰も見ていなくなるとどうしても弱くなる。

電気も点けずに翔はゆっくりとベッドに腰掛け、何もない宙を朦朧やりみづめと凝視する。そう言えば彼女の悲報が舞い込んで来てから殆ど電気を点けなくなった。気分が塞ぎ込んでいるからと言うのは勿論だが理由はそれだけではない。

…多すぎる。

…多すぎるんだ。

この部屋には繭子との思い出が多すぎる。

台所にも、ソファーにも、ベランダにも、部屋中の至る所、そこに彼女がいた記憶と重なる。この部屋に彼女がいた記憶が残ってい

ない場所など無い。彼女はどこにでもいた。

…見たら、

…そして思いだしたら、

…悲しく、寂しくなってしまう。

どこに目を向けても繭子の残像がふわりと浮かび上がってくる。

それならば彼女が映らない暗闇の中の方がずっと良い。ぬか喜びの残像を見せ付けられるよりまだ。だから電気はあまり点けたくない。

昼間の雨模様とは打って変わって空は星に彩られている。生憎、月は雲に隠れて朧おぼろげに弱い光を滲ませているだけだ。

翔の背後の四角く切り取られた窓から柔らかな星の輝きが射し込んで来て部屋の中を仄かに照らす。

…見たくないのに。

夜になっても、どうしても完全に視界を塞ぎ込めるような暗闇を得る事は出来ないらしい。まるで残留思念のように薄明るい部屋のそこここから繭子との記憶が浮かび上がっては消える。そんな思い出も今は悲しいだけだ。

部屋が幽かすかに明るくなった。

振り返り窓の外を見ると、月が顔を覗かせている。

月を覆っていた厚い雲はいつの間になくなって部屋の中にも銀色の月光が届くようになっていた。

翔はふと隣を向いた。そこに座っていたものを見て心臓が激しく高鳴り出した。

月光に照らされた白い肌。

仄かに紅い唇。

艶やかな栗色の髪。

翔は目を丸くしたまま啞然としている。隣に座っている彼女は月の光に照らし出された白い顔を静かに翔に向ける。そしてにっこりと優しい笑みを送った。

翔ははっとして彼女に躰を向ける。

「繭子！」

そう声をかけた途端に隣に座っていた彼女は音もなく消えていた。翔の呼び声だけが何もない壁に吸い込まれていく。

今のも翔の記憶。徒の記憶。そこに繭子が居た訳ではない。

…それも残像なのだ。

翔は伸ばしかけた手を力無く引つ込め、そして大きく仰け反り後ろに手を突いて天井を見上げる。

繭子は…もういない。

淡い幻想や期待は容易く打ち砕かれた。

唯そこに残されたのは…

…虚無。

空っぽだ。胸に大きな空洞が出来てしまった。

「繭子、居るのかい？」

……。

案の定、当然の事ながら返事はない。そんな事、翔も解っていた。しかし繭子に話しかけようとする事で彼女がそこに居るような錯覚を覚える。気の所為の自己満足だとは解っているが…それでもよかった。

翔は続ける。

「もし居るんだったら聞いて」

……。

「結婚式…挙げたかったよな」

……。

「ごめん、こんな暗い話してさ…」

……。

「正直、君がいなくなってしまったなんて未だ信じられないんだ。でも、もう会えなくなっただんだよな？そう思うと…寂しいな」

……。

「繭子？」

……。

「僕はそのまま生きていて良いんだろうか？」

……。

「ごめん…馬鹿な事言って、僕が死んでも君は喜ばないか…」

……。

「よし、じゃあこうしよう！繭子、僕は君の事を片時も忘れない。そうする事で君は消えない。君は永遠に存在するんだ」

……。

「一つだけ僕の頼みを聞いてくれないか？」

……。

「今夜はもう少しだけ…ここに居て欲しいんだ」

……。

我ながら正気の沙汰ではないと思っていた。しかしこうしているとまるで繭子が本当に傍に居るような気がする。

妄想に過ぎない。

それでも随分気は紛れる。

「ありがとう」

そう呟いて翔は目を瞑る。

背中に温かいものを感じる。心の底から安らぐ温かさ。まるで繭子が本当に寄り添って来ているような気がした。

…妄想にしては妙に現実的だ。^{リアル}

月光が翔を優しく包む。

月光浴

「あ、あの…お邪魔します」

勝手に入っではいけない事は解っていた。

しかし今の私には勝手に入る事しか出来ないのだ。出来る事ならきちんと約束しておいてから呼び鈴を鳴らして中から鍵を開けて貰って入りたかった。

残念ながらそれは出来ない。

仕方なく私は窓から失敬した。鍵はかかっていたが私には関係がない。

ひなきが探し物と言い出すといつもなかなか帰って来ないので先に屋根の上に戻っても退屈を持て余す事になる。だからひなきが探し物に出かけると私も散歩に出かける事になっている。

私は今、翔の部屋にいる。

翔に会いたかった。

さつき私の葬儀に来てくれていた翔の顔を見るとどうしても翔に会いたくて我慢出来なくなった。

…私もこの世に未練たらたらだ。

…ある意味、悪霊なのかも。

悪霊。

先程、その悪霊と呼ばれるものが人をとり殺した場面を思い出し、それを自分に重ねてしまった。私はそれを払拭するよう^{かぶり}に頭を振る。

…違う！

…私はあんなのじゃない！

…私は誰かを殺したいなんて思っていない！

ふらふらと部屋の真ん中までやって来て辺りを見回す。それにしてもこの部屋、翔の部屋には思い出が多すぎる。

台所。全く料理の出来ない翔にしょっちゅう晩ご飯を作っ

ていた。私が台所にいる間中、彼は何も分かっていない癖に「手伝おうか？」「僕は何をすればいい？」などと私の周りを付き纏っていた。狭い台所では正直言つて少し邪魔だったのだが、その優しさが嬉しかった。

ソファー。私が左、翔は右に座ると言う暗黙の規約ルールがいつの間にか出来ていた。私はいつも翔の左隣に座つて映画を観る事が多かった。彼は面白ければ直ぐ笑い、腹が立てば直ぐ怒り、悲しければ直ぐ泣いていた。本当に表情の種類が多い。私は映画よりもそれを観ている彼を観ている方が楽しかった。

ベランダ。整理整頓、おまけに掃除も下手な翔は私が注意しないと洗濯物も溜まりっ放しになる。見るに見兼ねて大量に溜まった洗濯物をコインランドリーに運び一日で総て洗ってしまった。そして洗い終わった洗濯物を干そうとベランダに出た。広いのにも何もないベランダは凄く勿体無いように思えた。シャツを干そうと思つたが竿が高くて背が届かない。必死に背伸びをしていると駄がふわりと持ち上がった。翔が私を後ろから抱き上げてくれていたのだ。彼は私に「ちび！」と言つてにこにこ笑う。非道い、背が低いのは気にしていたのに。私は不貞腐れていたが本当はこの上なく幸せだった。

……。

…嬉しかった（・）、楽しかった（・）、幸せだった（・）。

何故、総て過去形になつてしまつているのだろぅ…。

自分で考えておきながら、それは翔との永遠の別れを肯定してしまつているようで悲しく思える。

この部屋のどの場所にも私と翔の思い出は染み付いている。その総てが過去形になりそうで逃げるように窓の外に視線を送つた。いつの間にか陽は沈み夜になっている。雲に隠れた朧月おぼろぎがぼうと深い紺色の虚空に浮かんでいる。

突然、玄関の方で鍵の開く金属音が鳴った。

誰か帰つて来た。…誰かと言つてもこの家の主は唯一人。翔だ。

私は胸を高鳴らせて玄関の方を凝視^{みつめ}ている。

…翔に会える。

そう思っていたら薄暗い玄関から鞆が私の顔めがけて飛んできた。咄嗟に手で顔を覆ったが、飛んできた荷物は音も無く私を通り抜けて壁に打つかつて止まった。ごそごそと物音が聞こえる。

「…翔？」

声を掛けてみるも私の声は彼には聞こえない為、案の定返事は無い。その代わりにわあと言う叫び声が返って来た。

思わず私も驚いてわあと呼んでしまった。

暗闇からぬうと翔が現れた。目がとろんとしていて精神的にも肉体的にも随分疲れているようだ。

電気も点けずに翔は糸が切れた人形のように力無くベッドに腰を下ろした。翔がこんなにも疲弊している原因はきつと私が死んだ事なのだろう。私は翔の隣に座り彼の顔を覗き込んだ。

その時、私は息を飲んだ。

今の私には変な表現かもしれないが、本当に…心臓が止まりそうだった。

翔は私の目を確^{しっか}りと見ている。

「翔…まさか…」

…まさか

…私が見えている？

すると翔は弾かれたように躰をこちらに乗り出して来て声を上げた。

「繭子！」

思わず、「はい！」と返事をした。

私は目を大きく見開いて彼を見ている。彼は私の頬に手を当てて凝^{じっ}としていて。全身の血液が逆流し始めたかと思う程に躰が熱くな

った。
やがて翔は目が覚めたかのように私の頬に伸ばした右手を静かに引っ込めて、後ろに手を突き仰け反る。そして、彼はまた寂しそう

な顔をした。

窓の外を見ると、いつの間にか月にかかる雲が消えている。

… やっぱり

… 翔には私は見えない。

私の幻でも見たのだろうか、翔はとても… 悲しそうだ。

「繭子、居るのかい？」

再び翔は私に向けて声を掛ける。私の姿は見えていない筈なのに… その言葉は私に向けられている。

一方通行のお喋り。

悲しいが、どこか… 嬉しかった。

「うん、私は隣にいるよ」

私は返事をした。彼には聞こえていないだろうが少しでもお喋りのようなものをしたかった。

「もし居るんだったら聞いて」

「どうしたの？」

「結婚式… 挙げたかったよな」

「… うん」

そこで私は口籠ってしまった。

結婚式… 挙げたかったに決まっている。しかし今更何を言っても仕方がない。

気不味い沈黙に包まれる。

「ごめん、こんな暗い話してさ…」

「いや、良いんだよ。私こそ急に翔の前からいなくなってごめんね。そう言えばお別れも言ってなかったね」

お別れなんて今でも言いたくない。だが翔に何も伝えられないままに死んでしまったのは心残りだ。

「正直、君がいなくなってしまったなんて未だ信じられないんだ。

でも、もう会えなくなっただんだよね？ そう思うと… 寂しいな」

「まあ、私はこうして会いに来られるんだけどね… それでも、お喋りしたりは出来ないんだ… やっぱり… 寂しいよね」

「繭子？」

「ん？」

私は声を釣り上げて訊く。

「僕はこのまま生きていて良いんだろうか？」

身を乗り出して私は翔を諫める。

「な、何考えてるのよ！」

翔が私を追って自ら命を絶つなど私は絶対に承知しない。彼はそんなに弱い人ではない筈だ。

「ごめん…馬鹿な事言つて、僕が死んでも君は喜ばないか…」

「本当に馬鹿。私の為に死ぬ、なんて言い出したら絶対に許さないからね！」

翔が自嘲気味に苦笑する。死ぬなんて冗談でも言つて欲しくなかった。翔は何かふつ切つたような清々しい面持ちになった。

「よし、じゃあこうしよう！繭子、僕は君の事を片時も忘れない。」

そうする事で君は消えない。君は永遠に存在するんだ」

「うん…ありがとう。私も翔の事は絶対に忘れないからね」

私はこんな優しい翔が好き。

翔の言う通り私達お化けは生きている者から忘れ去られた時、この世での居場所を本当に失ってしまうのだろう。

しかし私は消えない。翔がこの世に居る限り私の存在が消える事はない。

そして私も翔の事を決して忘れない。

「一つだけ僕の頼みを聞いてくれないか？」

「何？」

「今夜はもう少しだけ…ここに居て欲しいんだ」

思わずはにかんだ私は少し溜めて、

「…うん。私も、そうするつもりだったよ」

と答えた。

私は翔の背中に凭もたれて膝を抱えて座り、窓の外の空に浮かぶ円い月を望む。背中越しに彼の体温を感じる。

…温かい。

今夜はここで…翔と一緒に月光浴をしよう。

「ありがとう」

翔はそう呟いた。

「うっん、こちらこそありがとう」

月明かりが眩しい。私は目を細めて銀色の月を見上げた。

「随分遅かったじゃない…心配したんだよ」

相変わらず姉のような口振りだ。

既にひなきはいつもの屋根の上に帰って来ていて、いつも通り特に何をするでもなく瓦の上で寝転んでいる。私は軽く頭を下げて彼女の横に腰掛ける。瓦がひんやりと冷たかった。

ふっ、と溜め息を洩らした私の顔にひなきはちらりと目を向けた。
「どうしたんだい、沈んじゃって？」

…沈んでいる？

「いえ、別に…」

私はそう言って押し黙った。

今の私は沈んでいるように見えるのだろうか。ひなきの言う通り今の私は沈んでいるのかもしれない、しかしもしそうなのだとしてみても何故沈んでいるのか上手く説明出来ない。

「全く、つれないねえ…妾^{わたし}に何でも話してみな。ちょっとぐらいは気分も晴れるかもしれないよ」

ひなきは肩を掴んで強引に私を寝転ばせた。

背中にあたる瓦が冷たい…気がする。仰向けに寝転んでみると目の前に大きな月が現れた。小高い丘の上にあるここは周りに電燈も何もない為に月の光が一際目立つ。耳を澄ませば幽かな虫の声も聞こえてくる。

「で、どこ行つてたのさ？」

ひなきが私の脇腹を肘で小突く。

「翔の家です…少し、彼が気になったので」

「そっか、本当に好きなんだね」

ひなきは相槌を打ったきり口を開こうとはしなくなった。彼女は黙ったまま夜空を見上げている。

妙な沈黙が辺りを包んでいる。

そう言えば今まで自分の事ばかり話していてひなきの事は何も知らない。この機会に色々和讯いてみようかと思った。

「ひなきさん…」

「何だい？」

彼女は再びこちらに目を向ける。

「ひなきさんには…好きな人がいますか？」

そう訊いた途端、ふっと薄く笑った彼女は私から目を逸らした。

…照れている？

「好きな人ねえ…」

私は軽く首を擡もたげて、隣に寝転ぶひなきの顔を覗いた。

…あれ、泣いている？

泣いている訳ではないようだが、どこか寂しそうな顔で遠くの夜空を眺めているようだった。

ます拙い事を訊いたのかもしれない。

さあ、どうだろうね、と暫く間を空けてから付け足した。

「忘れちゃったよ…昔の話だから」

ひなきはまた私の顔を見てにつこり笑った。矢張りその笑顔の奥に寂しげな色が見え隠れしている。

昔の話…

昔はひなきにも好きな人がいたのだろうか。

今はもう…

…いないのだろうか。

「ところで、アンタはいつまでこっちに居るつもりなんだい？」

あまり触れられたくない話題だったのだろうか、ひなきは早々に話題をすり替えた。

「いつまで……って？」

「否、別にさっさと出て行けって意味じゃないんだよ」

「……こっち（……）にいる？」

以前の彼女がしてくれた話では私達お化けは生前の念だけの存在と言う事だった。

よく考えてみれば訝しい事に気付く。もし今までに死んだ人総てがお化けになってこの世に留まっているのならばどこへ行ってもお化けでぎゅうぎゅう詰めになってしまっている筈だろう。しかし、それ程お化けとは出会わない。ここ数日間を見ている限りでは寧ろお化けの方が生きている人間よりも遥かに少ない。

「何故だろうか。」

「そう言えば私はこれからどうなるのだろう。」

「人は死ねばお化けになる……。」

「……お化けは」

「……その先は」

「あのさ、妾らみたいな普通のお化けは特にこの世に残る理由がなければすうって消えるもんなのさ。所謂成仏いわゆるってやつかい？その後

は妾も良く解らないんだけどさ」

ひなきは寝転んだまま足を組んで難しそうな顔をしてこめかみを搔いている。

「あ、でも悪霊はそうはいかないみたい……アンタもう見た？」

「……そうだ、あれは違う。」

「私はひなきの問いに静かに首肯した。」

先程、私が見た悪霊の最期は決して成仏だなんて綺麗なものではなかった。何か、もっと黒くて冷たくて禍々（まがまが）しい言葉……消滅。

「そう言った言葉が相応しい。」

「ああ、見たんだ……泥人形みたいに崩れちまってただろ？酷いもん

さ。普通のお化けはそんなふうに見えるんじゃない、もつとふわって…ううん、すすすうって…ああもう、じれったいねえ！」

上手く言い表せずに苛立っているらしい。だが大体の言いたい事は解る。兎に角、普通のお化けは悪霊とは違ってもつと綺麗な最期を迎えるらしい。

それを聞いて安心した。

「この世に残る理由つてのも人それぞれさ。友達に伝えたい事があるんだったり、残された家族が心配なんだったり、最後に見たい映画があるんだったり、それこそ悪霊なら復讐したいやつがいるんだったりね」

「私は…じゃあ」

ふと頭に翔の顔が浮かんだ。

「恋人だろ？」

その通りだ。ひなきが目を細めて微笑んでいる。

翔には随分心配させてしまった。否、それどころか私は彼を残したまま先に死んでしまつて非道く悲しませてしまった。

そして、非道く傷つけてしまった。

「翔が悲しんでいるのも泣いているのも私の所為です。だから彼がこの先幸せになれるかどうか心配なんです。せめて彼の悲しみが少しでも和らいでくれないと私は…」

「なるほど、じゃあアンタの彼が立ち直るのを見届けたいんだね？」

「はい、翔が幸せなら私は幸せなんです！」

私は力強くそう答えた。

「そんなもんなあ？」

眉に皺を寄せ、気の抜けた調子で苦笑するひなきを私は怪訝な顔で睨む。

「彼の幸せがアンタにとつても幸せとは限らないよ…きつと」

「なぜです？」

「まあ見てれば解るさ。妾も色々見てきてるからね」

私にはひなきの言っている事の意味がよく解らない。

翔が笑顔で生きてくれればそれで私も幸せなのだ。彼が笑顔でいてくれるのを見守る事が私の唯一の存在理由。彼がこの先ずっと幸せでいてくれる保証があるのなら私は今直ぐ消えても構わない。

…存在理由？

そう言えばひなきがこの世に存在している理由は何なのだろうか。

「ひなきさんは何故この世に残ってるんですか？」

「ああ、妾^{ただ}かい。妾は徒の探し物さ」

…探し物。

そうだ。ひなきは毎日一人で探し物とやらに出掛ける。

「もうどれぐらい経つんだろうね、本当に見つからない探し物さ」

「見つかりそうなんですか？」

「さあ…もしかしたら見つからないのかもね、もうかなり永い事ずっと探してるんだけどさ」

そう言つてひなきは大きく仰け反るように背伸びをした。猫のようにしなやかな彼女の躰の線が露わになる。

いったいひなきはいつから探し物とやらをしているのだろうか。

そして、どれ程の時を独りぼちで過ごしていたのだろうか。

「繭子ちゃん」

ひなきは私の名を呼んで微笑みかけてきた。夜よりも黒い彼女の髪は絹のように風にたなびく。私は彼女に抱いていた疑問など忘れてつい見惚れてしまっていた。

「これからも妾と一緒にいてくれないかい…」

勿論です、と私は笑顔で頷く。するとひなきもありがとうと答えて笑った。

私達二人は笑った。

何が可笑しいと言う訳でもないが兎に角笑った。お腹が痛くなる程笑った。瓦屋根の上で誰にも聞こえない笑い声が暫く続く。

今夜は月が綺麗だ。

本当に…月が綺麗だ。

私はもう暫くふわふわしようと思っ

僕の彼女は消えてゆく

歳月は流れる。

時の流れは思っている以上にずっと早い。

気が付けば繭子がこの世からいなくなってしまうてからもう三度目の秋がやって来ていた。

翔は仕事の帰り、唯一人^{ただ}ががらの最終電車に揺られている。

あれから翔は美妃と一緒にいる事が多くなった。翔は無二の愛しい者を、美妃は無二の親しい者を失っている。悲しみの刃物で負ったその傷をお互いに舐め合っているようでもある。

別に美妃と付き合っている訳ではない。

唯、月に二度程会って一緒に食事をしたりする程度だ。その時の会話の内容は仕事の話や学生時代の思い出話など世間話のようなものだ。

そしてお互い繭子の話題には触れないようになっていく。

少なくとも翔は意識して彼女の話はしないようにしている。どうしても治りかけた傷が再び口を開きそうで厭だったのだ。怖かったのだ。

翔の左薬指にはもう指輪は無い。

決して繭子の事を忘れたいと言うのではなく、その指輪を見ていると悲しい思い出が蘇ってくる。それが怖かったのだ。

駅に着いてホームに降り立つ。

吐く息が幽かに白い。改めて寒くなってきたのだと実感する。

その夜、翔が美妃と出会ったのは偶々（たまたま）だった。

「翔君？」

美妃の方から声を掛けてきた。どうやら同じ電車の違う車両に乗っていたようだ。

「翔君も仕事帰り？」

「ああ、そうだよ。美妃ちゃんもかい？お疲れ様」

美妃はにこりと微笑み、お疲れ様と返してくる。

… やっぱり、この子は

美妃はどことなく繭子に似ている。

外見は全然似ていない。髪型も服装も背丈も全く違う。しかし草食動物のようなおっとりした性格、何とも言えない優しげな雰囲気は一緒だった。

髪を耳に掛ける、息を吐いて手を温める。

仕草の一つ一つが繭子と重なる。

「今年も寒くなってきたね、昼間は暖かいのに夜になるとまるで冬みたいだよ。翔君も気を抜いてたら風邪ひいちゃうから気を付けようね。病は気からって言うじゃない」

「うん、僕は大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

一つの疑問が過る。

確か美妃の家はもう二つ先の駅だった筈。何故ここで降りたのだろうか。翔が怪訝な表情を浮かべていると美妃は何となく察したように口を開いた。

「どうしても…ここから先は電車に乗っていたくないんだよね」

… ああ、そうだった。

…ここから先は僕も乗っていたくない。

この先、次の踏切は…。

翔は美妃がその先を話す事を制するように深く頷く。

次の踏切で…

… 繭子は死んだ。

勿論、翔もそんな場所を電車に乗って通るなど厭だった。自分がこの世で最も愛していた者を撞り潰した乗り物に乗って、この世で最も愛していた者が撞り潰された場所の上を通るのはどうしても気分が悪い。

美妃の気持ちは痛い程によく解る。寧ろ繭子の婚約者であった自分はそんな事にもっと早く気付かなければならない筈なのだ。

愚鈍な自分に対して厭気が差した…。
直ぐに解る事が出来なかった自分が悲しい。

… 繭子は自分の中で
… 少しずつではある
… しかし
… 確実に
… 薄れていつている

そう思うと矢張り悲しい。

美妃はいつもここからバスで帰るのだという。夜も遅くに女の子一人でバスを待たせるのも危なっかしいと思ったのでバスが来るまで一緒に待つ事にした。すると美妃は照れ臭そうに「ありがとう」と言った。

伏目がちにものを言うその姿がますます繭子と重なる。

二人は改札を出てバスターミナルまで一緒に歩く。その間、会話は殆どない。電車の話で辛い過去を思い出してしまい、それが頭の中を巡りその事しか浮かばない。

翔や美妃の間ではあの事故の事は暗黙の禁忌^{タブー}となっている。どうしても辛い過去を思い出してしまうからだ。だから二人ともあの葬式の日以来、その事には敢えて触れないようにしているのだ。

辛い過去…。

… 繭子は

… もう過去の人なのか。

「ね、座ろう」

美妃が翔の上着の袖を子供のように小さな指で抓んで引つ張る。

二人はバス停のベンチに並んで腰掛けた。

駅前だと言うのに人足は疎^{まば}らで、バスを待つ者も他には誰もいない。時計を見ると午後十一時半を過ぎている。もう最終バスも行っってしまったのではないかと危惧して時刻表を見ると幸いあと一

本だけ美妃の自宅方面へ向かうバスがあるようだ。

凝じっとしていると躰が冷え始める。ふと隣に目を遣ると美妃は上着を躰に巻き付けるようにして丸くなっていた。

「もう秋なんだね、ちよつと寒いや」

「そうだね。何か温かい飲み物でも買ってくるよ」

翔は立ちあがる。

「指輪…」

その美妃の言葉で翔は釘を刺されたように動けなくなった。

「え、どうしたんだい？」

美妃の方を向く。すると彼女は置物のように前を向いたまま穏やかな口調で話しかけてくる。

「翔君…指輪してないんだ…もう」

翔は何も返す事が出来ずに押し黙ってしまった。

指輪とは婚約指輪の事だろう。永遠に果たされない約束の指輪。

言葉尻に置かれたもう（・・・）という言葉が厭に突き刺さる。

美妃は淡々と続ける。

「…三年だね」

そう、三年経つ。

禁忌の箱を紐解くように美妃はその歳月を口にする。翔はうんと相槌を打って彼女の隣に座り直した。

「あれ以来、私達よく二人で会うようになったよね。一人で抱え込めないくらい悲しい事も二人で持てばずっと楽なんだね。私、翔君がいなきゃ…多分耐えられなかった」

「僕も同じさ。美妃ちゃんがいなかったら…本当に辛かった」

これは本心だ。

愛する者を失った悲しみは大き過ぎた。本当に死んでしまおうとさえ思った事もあった。それでも同じ悲しみを持つ美妃とそれを共有する事で漸く自分を保てていたのだ。

気が付けば翔の中で美妃と言う存在がどんどん大きくなり、大切なものになっていた。しかし…。

「彼女できた？」

「いや、いないよ」

そっかあ、と美妃は吐息混じりにそう洩らすとゆっくりと翔の方に顔を向ける。

「彼女。いないんだ」

翔は首を縦に振る。

「もう繭子は…翔君の彼女じゃないんだね」

心臓を鷲掴みにされたような衝撃だった。

美妃の存在が大きくなるにつれ、それに反比例するように繭子の存在が小さく臍げになってゆく。

人は死んでも存在が消える事はない。しかし生きている者の記憶から消えてしまうと、その人が存在していた事も消えてしまう。翔は知らず知らずの間に繭子という存在を消してしまっていたのだ。

「い、いや。そう言う事じゃ…」

醜く言い訳をしようとしても上手く言葉が出て来ない。

「ごめんなさい。翔君に意地悪するつもりなんかじゃなかったんだよ。でも私ちよつと非道い事言っただよね…本当にごめん」

「いいんだよ…気にしないで」

美妃は申し訳なさそうな顔をして俯いているので話題を変える事にした。

「彼女か。出来ないなあ…僕全然もてないから、ははは」

やや自嘲気味に頭を掻いてお道化どけて見せた。

「嘘でしょ、翔君は賢くて背も高いし、それに優しいのに」

「そんな事言われても本当に僕はもてないんだって」

すると美妃は翔の袖口をちよいと引っ張って言った。

「私じゃ駄目かな？」

辺りから音が消えたような気がした。

美妃の目を見た途端に呼吸が止まった。涙目の美妃は上目遣いに熟じゅと翔を見据えたまま凝じっとしている。

翔にとって美妃は大切な存在ではあるが恋人として見た事はなか

った。しかし今の翔にとって美妃は必要な存在だということも事実。
翔は彼女の茶色い瞳を凝視^{みつめ}たままで何も言えないでいる。

時間が遅く流れてゆく。

「じよ、冗談だよ冗談！もう…翔君ったら早く何か言つてよ、恥ず
かしかったじゃない」

美妃は愉快そうに笑っている。どうやら擲^{から}かれていたらしい。

暗い夜道の先からぱつと眩しい光が伸びてくる。

漸^{わだか}くバスが来たようだ。

「態々^{わざわざ}付き合ってくれてありがとう。翔君のお陰で独りぼつちでバ
スを待つて寂しい思いをしないで済んだよ」

「いいんだ、僕も暇だったから」

非道い、私は暇潰し？と冗談ぽく怒っている。やがてバスが最終
である事を告げながら目の前に停まると二人は徐^{おもむろ}に立ち上がる。

「じゃあね、また話そう。それじゃ気を付けて」

「うん、翔君も気を付けてね」

翔は彼女に手を振り、踵^{かかと}を返して歸路に着いた。

幽かに冬の気配を感じさせる澄み渡った秋の夜空を見上げると、
そこには相も変わらず銀色の月が浮かんでいる。秋の月は四季の中
でも一番綺麗だ。しかし毎年そんな月を見上げると悲しい思い出も
蘇る。

後ろの方でバスが発車する音が聞こえる。そしてターミナルの灯
りが消されて辺りを夜の静寂が包む。

…いつまでだろう。

…いつまでこの月を見て悲しまなければいけないのだろう。

翔はそそくさと逃げるように下を向いて歩き始めた。

静かなのは厭だ。

寂しいのは厭だ。

悲しいのは厭だ。

早足に歩いていると自分とは別の足音が聞こえた。それは小走り

に翔の方に近付いて来たかと思うと翔の腕はその何者かに掴まれた。何者かと思い振り返ると腕を掴んでいたのは美妃だった。

美妃はさっきの最終バスに乗って帰った筈だ。どうしてここにいるんだと問おうとしている所で美妃は突然翔の躰に抱き付いてきた。ふと、甘い香りが翔の鼻を掠める。

「美妃ちゃん…何を」

翔が少し抵抗しても美妃は翔にしがみ付いて離れようとはしない。

「本当に…」

「え、何だい？」

「私じゃ…駄目？」

震える声を振り絞るように美妃はそう呟き翔の顔を見上げた。彼女の目から涙が溢れ出しそうになっている。

…僕は

…どうすれば

翔は小さな美妃の躰を強く抱きしめた。

ふと、繭子に似た匂いがした。

美妃は翔の胸に顔を埋めてくる。

翔も美妃の躰が壊れてしまう程、強く抱きしめた。

繭子に似た匂いはしなくなった。否、その匂いが繭子に似ていると思わなくなったのだ。

翔の中の繭子がまた小さくなってゆく。

繭子以外の女の子を部屋に入れたのは初めてだった。

最終バスが行ってしまった以上、美妃は帰る事が出来ない。夜道を一人で歩いて帰らせる訳にもいかないので今夜は翔の家に泊まっていさせる事にした。

別にタクシーを拾ってやれば良かったかもしれない、なんなら自

転車で彼女の家まで送ると言う事も出来た。それでも彼女を家に招待する事にした。

決して下心があつた訳ではない。唯、今夜はもう少し彼女と居たかった、それだけなのだ。しかしそれも下心と呼べないでもないかもしれない。

美妃が部屋の中を珍しそうに見て回る。彼女がその場所を通るたびにその場所から繭子が消えてゆく。

…繭子が

…消えてゆく

やがて二人は男女の関係になつていた。

月明かりが射し込む四角い窓、翔の隣で寝ている美妃は寒そうにブランケット
毛布で軀を包んだ。

「ねえ、翔君？」

月光に晒された彼女の肌は妙に青白く妖艶に見えた。美妃が奇妙な事を言い出したのはそんな時だった。

「靈感つて…ある？」

翔は訝りながらも、さあ判らないよと返した。

そっか、と呟き美妃の表情が曇る。彼女の肌が青白く見えるのはどうやら月明かりの所為だけではないようだ。

青褪めているのだろうか。

「私…ちよつとだけ靈感つてあるんだ」

「そうなんだ…」

美妃はもぞもぞと翔の軀に擦り寄つてふつくらした唇を翔の耳に当てる。

「どうしたんだい？」

すると美妃は震える声で囁く。

「この部屋、誰か居るよ…」

私の幸せ、私は悪霊

今日は一際陽光が眩しい。

私は相も変わらずあの屋根の上でひなきと一緒にごろごろと寝転んでいる。いつしかひなきは私にとって本当の姉のような存在となっていた。

そんな姉はひょいと私の顔を覗き込む。

「どうしたのさ、浮かない顔しちゃって…何かあったのかい？」

流石にいつも一緒にいるだけの事はある。ひなきは私の顔を見ただけで考えている事が手に取るように解るらしい。

どうやら彼女の前で隠し事は無意味のようだ。

「翔に…新しい彼女が出来たんです」

あらら、とひなきは口元を押さえる。

数週間前、私は見てしまった。

翔は私の親友である美妃を連れて部屋に帰って来た。そして…その後の二人の事も見てしまった。躰がばらばらになりそうな程に辛かった。

しかし本当に辛かったのは情事を見た事ではない。

翔は嬉しそうな、幸せそうな顔をしていた。

かつて私に向けてくれていたような幸せな顔。

あんな顔、私が死んでからは一度もした事がなかった筈。あの穏

やかな翔の優しい笑顔は私だけの物だと思っていた。

…彼が幸せならそれで私も幸せ

…彼が幸せに生きてくれるのが私は一番嬉しい

…だけど

…だけど！

その幸せそうな顔を見ているとだんだん寂しくなった。もう翔には私は必要ない、私がいなくても幸せなのだ。そう思うと喚き散ら

したい程に悲しくなった。

そして私は逃げるように彼の部屋を飛び出したのだ。

―彼の幸せがアンタにとっても幸せとは限らないよ…きっと

ひなきが私と出会った頃に言っていた言葉を反芻する。

あの時は意味が解らなかった言葉も今となって何となくその意味が解り始めた。確かに翔の幸せは私にとって…

…少し辛いかもしれない。

「でも、美妃なら良いんです…美妃だから良いんですよ」

私は少しばかり興奮して軀を起こした。それでもひなきは寝転んだままふうんと気の抜けた返事をしたただけだった。

「美妃は私の親友なんです。すっごい良い子なんですよ。美妃となら翔だって絶対に幸せに生きていけるんです」

…私とは生きていけないけど

ひなきが何も聞いていないのにも拘らず私は勝手に答えている。

…答えている？

…いったい誰に？

ひなきに言っているのではなく自分にそう言い聞かせているのだ
った。

「ほんと、アンタは健気だねえ」

そう言っってひなきはふわりと軀を浮かべ、大きな欠伸と一緒^{あくび}に大きく背伸びをした。

「ちよつとひなきさん、聞いてるんですか！」

気の抜けた彼女の態度に少しだけ腹が立った。

「もう、五月蠅^{うるせ}いねえ。アンタちよつと苛々し過ぎだよ。何で怒ってんのさ？よく判らないけど八つ当りは止しておくれ」

「ごめんなさい…」

彼女の言っ通り今の私は少し臆^{ヒステリック}躁^{わたくし}的になっていた。

「じゃあ妾^{わたし}は出かけてくるから、アンタも散歩にでも行っといで、

ちょっと頭冷やした方が良いよ」

そう言ってひなきは町の方に飛んでいった。

きつといつもの探し物とやらだろう。

彼女は毎日必ず探し物に行く。しかし未だに彼女が何を探しているのかは知らない。それを訊こうとするといつも話をさらりと変えられてしまう。

彼女がいなくなると本当に退屈になるので私も散歩に行く事にした。

随分と浮かぶのも上手くなったと我ながら思う。目を瞑り温かい海をイメージする、すると私の躰は波に漂う布のように運ばれていく。仰向けに浮かびながら町を見下ろす。

三年の間に町も随分と変わった。

駅舎の壁が塗り直され温かい橙色になった、駅前のケーキ屋はリニューアルした、繁華街には大きなショッピングモールができた。

しかし…

…私は何一つ変わっていない。

いつも屋根の上で寝転んだり散歩に出掛けたり生活。服はいつも同じのを着ている。髪の毛は少しも伸びていない。

…私の時間は止まっている。

変わってゆく町や人々を少し羨ましく思う。生きている時は永遠に齢をとらずにずっと若くて綺麗なままでありたいと思っていた事もあったが、実際にそうなってしまうと思っていた程良いものでもなかった。

変わらない（……）のではない…変われない（……）のだ。

生きている人達はどんどん変わっていく。齢を重ねる内に色々な出来事を経験し大きくなっていく。過去を置き去りにして未来へと歩いて行く。

しかし私はこれ以上何も変わらない。

私は過去の亡霊。

そう。

…亡霊だ。

私にはあの小高い丘の小屋以外にももう一つよく訪れる屋根がある。所謂^{いわゆる}行きつけと言った所だ。

翔が住んでいるマンションの屋上。

いつも翔の顔が見たくなつてここに来てしまう。最近の翔は特に幸せそうな顔で生き生きしているので見ているこっちまで嬉しくなってくる。

しかし彼が幸せそうにしているその理由は私にとって少し複雑だ。私はたった独り屋上の柵に肘を乗せて凭^{もた}れかかる。ふと空を見上げるといつの間にか空を白い雲が覆っていた。どこか憂鬱な気分になる。

雲に覆われた重苦しい空を眺めて大きな溜め息を吐く。

…ああ、何か…厭だな

その時、背後で誰かが螺旋階段を上つて来る音が聞こえた。後ろを振り向くと私もよく知っている人が立っている。

…なんだ、今日も来てたんだ。

そこには翔の彼女。美妃の姿があった。

美妃はこの三年で凄く綺麗になっている。私はそんな彼女が羨ましく、それから…少し嫉ましかつた。美妃は首に掛かるぐらいの栗色の髪を風に靡^{なび}かせながら私の方へとつかつかと歩み寄つて来る。そして私の隣で立ち止まり、私と同じように柵に凭れかかった。

「美妃ったら本当に綺麗になったよね…いいなあ」

こうして親友同士で隣に並ぶ事など何年振りだろう。

懐かしい。

昔は本当に毎日のように一緒に遊んでいた。悩み事があったら真っ先に美妃に相談していた。嬉しい時も悲しい時もどんな時でも美妃と一緒にだった。そのままずっと私達がおばあさんになっても美妃

とは親友でいられると思っていた。しかし私がそれより随分先に死んでしまった所為でもうそれも叶わない。

美妃の顔を覗き込むと随分と沈んだ顔をしている。否、寧ろ泣き顔と言った方が近いのかもしれない。翔と喧嘩でもしたのだろうか。彼女は唇を震わせながら呟く。

「ごめんなさい…繭子」
びくり
吃驚した。

今、美妃は明瞭はっきりと私の名前を口にした。

まさか彼女には私の姿が見えているのだろうか。怪訝に思い彼女の前に立ったり肩を叩いてみたりしたが矢張り何の反応もなかった。どうやら独り言を呟いているらしい。

ごめんなさい、とは私の婚約者である翔と交際している事を後ろめたく感じているのだろうか。

塞ぎ込んでいるような親友の表情を見ていると私はいてもたつてもいらなくなり、彼女の独り言について口を挟んでしまった。

「いいんだよ、美妃なら翔と付き合っても私は怒ったりしないよ」

私は美妃の頭をぼんと撫でる。声が届かないのが残念でならない。

…翔をよろしくね。

美妃ならきつと大丈夫。私はそんな親友に笑いかけてそろそろ帰ろうかと空を見上げる。

しかし、次に美妃の口から零れた言葉に戦慄せんりつした。

「殺すつもりはなかったの…」

全身から血の気が引いていく。

「え…何の話？」

「本当にごめんなさい…繭子」

意味が解らない、美妃は何故私に謝っているのだろうか。胸の中が濁った泥水で満たされてくる。

美妃は堰を切ったように言葉を続ける。

「私は繭子を殺すつもりなんかなかったのよ！」

我が耳を疑った。

「美妃、あなた… いったい何を言ってるの…」

「私は繭子が羨ましかったの… ずっと好きだったの、私も翔君の事が。だからあなたの事が死ぬほど羨ましかった。あなたが翔君との事を嬉しそうに話すたびに… ちょっと悔しかった」

美妃は項垂れ、冷たい柵に額を当てる。そして彼女は曇り空に向かって懺悔するように言葉を紡いでゆく。

「三年前のあの日、私はどうかしていた。繭子は翔君と結婚することが決まった事を私に話してくれた。胸が張り裂けそうになったわ。踏切の先で電車が勢いよく走っている、目の前には繭子の背中、誰も見ていない、もし… 今、私が繭子の背中を少し押すだけで… たったそれだけで…」

… 美妃。それ… 本当？

… 美妃が… 私を

「そんな恐ろしい事が思い浮かんでしまったの。悪魔に唆そそのかされたみたいだった。何を馬鹿な事考えてるんだろう。そう思った時には… もっ…」

遅かった… そう結んで美妃は糸の切れた人形のように俯いて動かなくなった。

… 嘘、だよ

… 美妃。嘘って言ってよ。

「あの時、私の掌てのひらには確しつりと繭子の背中せなかの感触が残っていた。取り返しのつかない事をしたんだと解った。でもその事はあつさりと事故だと処理された。自首しようとも思っていたんだけど… 結局言えずじまい。毎日苦しいの… 胸が締め付けられるの。今でも掌に残ってるんだ… 繭子の… 最後の温もりが」

… 非道ひどい

… 非道ひどいよ、美妃。

「私は今… 翔君の彼女になっている」

… あんまりだよ、そんなの

「私、このまま幸せになつてもいいのかな…」

そう言つて美妃は口を噤つぐんだ。

私の胸の中から黒い液体が溢れ出し、それが汗となつて全身から流れ出してくるような感覚を覚えた。

躰が引き攣る。

手が震える。

目が翳かすむ。

「こんな所にいたのかい？」

懐かしい声がする。

翔も屋上に上がつて来たようだ。螺旋階段の所から彼は顔を覗かせている。

「寒くなつてきたんだからいつまでも外にいと風邪ひくよ。さあ部屋に戻ろう」

相変わらず翔の笑顔は優しい。

しかしその笑顔は私に向けられていない。彼には私が見えない。翔が私に笑いかける事はもうないのだ。

永遠に。

うんと返事をして美妃は私の躰を透き抜け、翔の元へと駆け出す。そして嬉しそうに彼の胸に飛び込んだ。そして二人はそのまま屋上から姿を消した。

私はたった独りで屋上に残り残された。

全身の力が抜けてその場に膝を着く。

…そんな

…翔も非道いよ

…何で私だけ

…非道すぎるよ

私はゆっくりと首を擡げて空を睨む。そして曇り空に向かつて喚き散らした。頭を掻き毟りながら声が枯れる程に絶叫、否、慟哭とつぐし続けた。

声を張り上げる度に私の中で何かが音を立てて崩れ落ちていくのが判る。

…辛い

…何でこんなに辛いのか？

…誰の所為？

…判った

…辛いのは何故か

…判ったよ

私の声はやがてがらがらに噎^かれて、まるで醜い獣の咆哮のようになつていた。そして震える手を見ていると皮膚がどろりと溶けるように剥がれ落ちた。

…ゆるさない

私の胸の中の黒い水はぐつぐつと沸騰し始める。

「アンタ、いったいどうしたんだい！」

白いブラウス、黒い髪。

…ひなきさん？

音も無くひなきが傍らに現れ、私の腕を掴んでいた。いつも冷静であり、そして呑気なひなきがこんなに慌てているのを初めて見た。「何かアンタの叫び声が聞こえたから飛んできたんだけど、何があったのさ！」

…ああ、ひなきさん

「妾が判るかい？それよりアンタ今自分がどうなってるのか解ってるのかい！」

…私が？

…どうなってるか？

私はひなきの言っている事の意味がよく解らず、珍しく狼狽する彼女の顔を唯見ているだけだった。するとひなきは重々しく口を開く。

「アンタ…悪霊だよ」

そう言ったきりひなきは黙り込んだ。

私はひなきの腕を振り解く。

…美妃は非道い。

…本当に非道い。

そんな事を考えていると私の躰は氷菓子が溶けるようにどろどろとアスファルトの床の上に爛れ落ちる。そしてその冷たいアスファルトの上にしみ込んでゆく。ひなきが私の名を叫んでいるような気がしたが返事は出来なかった。

私の躰は液体だ。

汚く淀み濁った腐水。

床に滲んで階下へ流れる。

ぽたりぽたりと落ちてゆく。

どこまで流れてゆくのだろう。

私は天井から逆さまに頭を突き出してこの部屋を視ている。

…じいつと視ている。

ここは翔の部屋。

何だか楽しそうな声がリビングから聞こえている。どうやら翔と美妃はソファ―に腰掛けて二人で映画を観ているらしい。私も生きている時はよく翔と一緒に映画を観ていた。しかし今翔の隣にいるのは私ではなく…美妃だ。

美妃が私の席に座っている。

ふと真下に目を向けると水溜りが出来ていた。これは私の雫、どろどろと溶けた私の雫、二人には見えない私の躰。私はそのまま床の上にひたりと落ち、ずるずると汚らしい湿った音を立てながら立ち上がる。

ソファアの上で楽しそうに映画を観ている翔と美妃。

幸せそうな二人から目を背けるように何となく姿見を覗いた。そこに映る私の姿は黒に近い灰色がかった色をしていて、体が溶け出しているように爛れている。顔もどろどろと渦を巻くように変形していて、辛うじて人の形を留めていると言った具合だ。

そして私の瞳は白く冷たい光を放っている。

…悪霊だ。

…私は

…もう悪霊なのだ。

ずるずると体を引き摺らせながら二人に近付いていく。彼らには私の姿など見えてもいないのだろう、二人はおぞましい姿になった私とは対照的に楽しそうに談笑している。

…本当に私だけ蚊帳の外だ。

電話台の上に写真が立て掛けられてある。

この前見た時はこんなもの無かった。丁寧に硝子の額に入れて飾られているそこに映っていたのは仲良く寄り添い合う翔と美妃の姿だった。

胸の中で沸騰した黒い水の泡が弾ける。

私は爛れた手をその写真に伸ばす。

死神の聲

ぴしりと何かが割れるような音がした。

翔は不思議に思つて部屋の中を見回してみたが音の正体は判らなかった。部屋中に一通り視線を泳がせてから最後に傍らの美妃に視線を送った。翔の視線に気付いたのか美妃はふと顔を向けた。

「どうしたの？」

美妃は翔の顔を熟と凝視^{じつみつめ}る。

「ああ。今、何か割れるような音しなかった？硝子か何かが…」
「そう言えば聞こえたよねえ」

美妃の目が赤い。

もしかすると彼女は先程屋上で泣いていたのだろうか。もしかすると彼女は自分と一緒にいる事に対して何か後ろめたく思っているのだろうか。翔は思う。元々美妃とは繭子の死の悲しみを慰め合っていたようなものだった。

しかし今の関係はどうだろう。そう考えると繭子に対して悪い事でもしているように美妃は感じているのだろうか。

確かに繭子に対して後ろめたい気持ちには翔にもあった。繭子が死んでから初めて美妃と二人で会った時は繭子に隠れて彼女の親友と浮気をしているような感覚だった。しかし繭子が死んだと言う事を現実として受け入れ始めるとそんな感覚も徐々に消えていった。

今、翔にとつて一番大切なものは美妃なのだ。

「あ、もしかして…あれじゃないの？」

美妃がひよいと立ち上がり電話台の方へと歩いていく。

「やっぱりだよ、もう最悪…見てよこれ」

写真立てに蜘蛛の巣のような放射状の罫^{ひび}が入っていた。それを見て美妃はげんなりしている。

「この写真気に入ってるのに」

「でも中身の写真は無事だろ？じゃあ良いじゃないか。写真立ては

また買えば良いしね」

そう宥め^{なだ}られて美妃は漸く表情に明るみが差した。翔はこんな美妃との何気ないやりとり、何気なく過ぎる毎日が幸せだった。

ソファーに凭^{もた}れた翔は優しく微笑んだ。

大切な友達

目の前には美妃の顔。

汚い感情が胸の中で渦を巻き息が苦しい。

美妃のか細い首筋を凝視る

…本当に細い。

手を掛けてほんの少し力を入れるだけで簡単にへし折れてしまいそうだ。

悪霊はこの世に影響を与える事が出来る。その証拠に私が握った写真の額は割れてしまった。

…矢張り私は悪霊だ。

美妃は私を殺した。

それでも彼女は裁かれない…きっとこの先も裁かれる事はない。ずっと私の翔と幸せそうな顔をしながら生きていくのだろう。

私はその首に罅^{ひび}割れ出した手を置いた。

…あたたかい

…いいなあ

その細い首には確かな血液の流れ、確かな生命の温かさがあった。

…美妃は私を殺した

…美妃の所為で私はこんなに冷たいんだよ

…美妃は私から翔を取った

…私はもう翔を取り返せない

…美妃が私を殺したんだもんね

…くやしいよ

…だから

…せめて

…私も美妃を殺していいのかな？

不意にあの写真が目に入る。

割れた写真の中の翔と美妃は仲睦まじく寄り添い幸せそうに笑っている。寄り添う二人の間には私の入り込む隙間などもない。

今の翔には死んだ私よりも生きている美妃の方が大事なのだろう。翔が笑っていられるのも美妃がいるからなのだろう。逆に私は翔を悲しませて泣かせてばかりだ。

写真の中の翔は笑っている、美妃も笑っている。その写真の中の二人の笑顔は今の私には眩し過ぎる。

私はゆっくりと美妃の細い首に爪を立てた。

「おかえり、随分遅かったじゃないか」

聞き慣れた声のする方を見上げる。

矢張りひなきはいつもの瓦屋根の上で寝転がっていた。そして私に対してもいつもと同じような台詞を言った。

つい先程まで曇っていた空も所々に晴れ間が除き、真つ赤な夕陽が干切れた雲を鮮やかなオレンジ色に染め上げている。

「どうだい、ちよつとはすつきりしたかい？悪霊の繭子ちゃん」

軀を起こしたひなきはそう嘯うめいてくすくすと笑う。彼女の言う通り私は悪霊になった、そして彼女の言う通り私はすつきりした。

ひなきは大きな欠伸あくびをしながら背伸びをする。

「ほら、いつまでそんな所ではけつとしてんのさ。こっちに来て妾の隣に座りなよ」

私は彼女の言う通り屋根に浮かび上がりいつもの瓦屋根の上に腰を下ろした。

「綺麗な夕焼けだろ、やっぱり秋の夕焼けとお月様は絶品だよ。清少納言の言ういとをかしってやつかい」

愉快そうに笑うひなきの頬もあの雲と同じように夕陽に染まっている。白い肌に赤みが差していて夜の彼女よりも官能的に見える。

「ひなきさんは知っていたんですか」

「何をだい？」

「私が死んだ時の事を…」

夕陽に染まる町を眺めたままひなきは何も答えない。

「だって見てたんですよね、私が電車に轢かれた所を！」

ひなきは静かに頷く。

「じゃあ私が死んだのも事故じゃなくて殺されたんだって知ってましたよね、あの時美妃に背中を押されたんだって！何で言ってくれなかったんですか！」

莫迦^{ばか}…。ひなきは小さく呟いた。

「言える訳ないじゃないか、友達をみすみす悪霊になんかせたくないだろ！」

私ははつとなって口を噤んだ。ひなきの唇が幽かに震えている。

「最初はアンタが気の毒で近寄ったんだ、死んで独りぼっちって寂しさは妾にもよく解るからね。何も知らないまま成仏してくれれば良いって思ってたのさ。でもアンタはすごく良い子だからね、気が付けば妾にとって大事な友達になってたんだよ。アンタだって自分が殺されたって知ったら腹が立っただろう？悔しかったろう？仕返ししてやりたくなっただろう？実際、アンタも悪霊になっちゃったじゃないか…。妾には出来なかった…。アンタが悪霊になる所なんて、アンタが人を殺す所なんて、アンタがバラバラに消えちまう所なんて見たくなかったのさ！」

ひなきらしくない。彼女は感情的になっている。しかし私は嬉しかった、友達と言う言葉が。

「でも今アンタがここに帰って来てくれた事…妾は嬉しい。消えてないんだね。って事はアンタにはまだこの世でやる事があるんだろ」

「はい…」

「ほら、やっぱりそうさ」

そう。ひなきの言うとおり私にはやる事がある。だから私は未だ消えずにこの世に残っている。

「でも少し時間がかかりそうなんですが…」

「良いんだよ、妾達には時間だけは腐る程あるんだからね」

…友達。

その言葉の響きがとても温かく感じた。私は死んでから出来たこの清楚で綺麗で少しおてんばな友達が大好きだ。

「アンタに少しでも昔話を聞かせてあげる。夕焼けを見ていたら何か気分が良くなってきたね。一寸ばかりお喋りちやつとがしたくなったよ。長くなるかもしれないから退屈だったら寝ててもいいよ。まあ、適当に聞き流してくれたら良いさ」

ひなきは長い黒髪を耳に掛けて私の方を向いた。

「昔話ですか？」

「ああ、そうさ。昔話さ」

陽は更に傾き始め私達二人以外の総ての影を細長く伸ばしている。あれ程眩しかった夕陽も徐々に力が弱まってきたようだ。

空は着実に夜色に染まりつつある。

そしてひなきは静かに口を開いた。

「アンタによく似た、女の子の話さ」

ひなき

これはね今から何十年も、否、もしかすると百年近く前の話さ。

この国も今となつちや世界でも一番豊かな国の一つだけどその頃は貧しくてね、世界恐慌だか何だか知らないけどみんな食うや食わずやの切羽詰まった生活をしてたんだよ。

特に田舎の方の農家なんか非道いもんさ。自分達が食い繋ぐ為に実の子供を売るなんて親もさらにたんだ。

所謂^{いわゆる}人身売買^{いんじんばいりゃく}つてやつかい。

売られちまった子の殆どはもう二度と親にも会えないのさ。本当に非道い話だろ。

今から話すその女の子も同じさ。

十才の時にとある商家の奉公に出されたんだ。

まあ奉公と言っちゃあ聞こえは良いんだけど、もう親元に戻る事は出来ない。ずっとそこで働きながら暮らしていくんだ。謂^いわば籠^{かご}の鳥。要するにその女の子も売られたつて訳さ。

その子は父親に手を引かれて奉公先の商家までやって来た。それは女の子が今までに見た事も無い程に大きくて立派なお店だった。

「奉公先ではきちんと言う事を聞くんだぞ」

「躰には気を付けるんだぞ」

奉公先の店先で女の子の父親がそんな事を言っていた。最後に父親は女の子の頭に大きくて温かい手を置いて、

「すまん」

と言った。

女の子の父親はその時…

泣いていた。

でも女の子はまだ小さかったから父親が何故謝るのかも、何故泣

いているのかもよく解らなかったのさ。また直ぐに父親が迎えに来てくれるんだと思っていたんだ。

「じゃあ、元気でな」

そう言つて父親はとぼとぼ歩いて行つた。途中で名残惜しそうに女の子の方を何度も振り返つた。

でも…やがて父親の背中は夕暮れの雑踏の中に消えていったのさ。

それが…。

女の子が最後に見た父親の姿さ。

そして否応なしに女の子の新しい生活が始まつた。

奉公先の人達はそりやみんな親切だったけど決して楽なもんじゃなかったよ。なんたつてまだ十才の子供だったんだからね。

それから女の子は叱られたり、褒められたりしながら必死で仕事を覚えていった。時々父親の事を思い出して泣いたりもした。

気丈な振る舞いをしていてもやっぱり子供は子供さ。

女の子はやっぱり父親の事が恋しかったんだよ。

それから八年が経つた。

女の子が十八歳になった時、転機が訪れた。

彼女に好きな人が出来たのさ。

よく乾物やら何やらを買いに来てくれる背の高い男の人。洋装がとても似合う素敵な人。その子よりも少し年上で頼りがいがあつて

…優しい人。

その人も女の子の事を気に入ってくれたらしくて女の子が店先にいる時はよく声をかけてくれた。

女の子は年頃になつて初めて人を好きになつた。

時々、奉公先から暇を貰つて近くいとまの川まで彼と一緒に釣りをしに行つたりもした。紅葉の並木道を散歩したりもした。

女の子は彼と居る時間が好きだった。彼と会う時、女の子はい

つもお気に入りの真っ白なブラウスを着ていたよ。

どこにいても彼が直ぐに見つけてくれ易いように…

…目の醒めるような

…真っ白なブラウスをね。

彼の家に遊びに行った事もあったんだ。彼は町外れにある小高い丘の上にある小さな家に一人で住んでいてね、家族もいないみたいだった。女の子と同じで…家族はいなかったのさ。

彼の家の屋根に上ると町を一望する事が出来るんだ。

優しい彼は女の子の手を引いて屋根まで上げてくれた。二人はよくその瓦屋根の上に寝転んで雲を眺めていたのさ。女の子はそんな自由な雲になりたかった…自由になりたいと思っていた。

二人はやがて毎日会うようになっていった。だけど幾ら親密な関係になっても彼が女の子に躰を求めるような事はしなかった。それでも女の子からすれば彼に縋てを捧げても良かったんだろうけどね。彼が女の子を身受けしてくれる事になったのは秋も随分深まった頃だった。身受けつてのは今で言う婚約ってやつさ。

嫁に貰われるようになると八年以上も働いた奉公先でのお務めもそれで終わりさ。

女の子はそれはもう嬉しくて…嬉しくて…思わず彼に抱き付いたよ。

幸せだった。

ずっと彼と居られる。

そして…

自由になれる。

女の子を閉じ込めていた籠の鍵は開かれた。これで女の子は自由に空を飛ばたく鳥になったのさ。

でも…

世の中、そんなに甘くはない。

ある日、女の子は彼に連れられて町に出たんだ。

彼は心なしか浮かない顔をしていたように思えた。どうしたのと尋ねても、いや何でもないと云って口籠るだけ。彼は目的も無く町を彷徨さまよっているようだった。

不意に彼は日当たりの悪い路地に入って行く。何だかガラの悪い男や草臥くたひれた娼婦みたいな女がうろついているような所。

女の子は少し怖かったけど彼と一緒になら大丈夫と思つて安心してゐた。それでもやつぱりおっかないから歩いている時も彼の手を確しっかりと握つていたんだよ。

暫く歩いた先に石造りの小汚い建物があつてね、雑居ビルつて言えぱ判り易いかい、彼はその前で立ち止まつたんだ。知り合いに用事があるからと言つて女の子も一緒にその建物の中へと通された。

無機質なりノリウムの床。

粗末な椅子と洋卓テーブルがあるだけの殺風景でいて狭苦しい部屋。

彼に促されて女の子も遠慮がちに腰を下ろす。椅子の錆びた骨組みがみしりと軋む音が部屋に響いた。

暫く彼は無言のまま座つていた。どこか女の子の視線から逃げるように天井や壁、床なんかに視線を泳がせていた。彼は妙にそわそわしているんだ。

すると女の子の後ろの扉が開く音がした。

扉の間から顔を覗かせていたのは、本当に彼の知り合いなのかと疑いたくなるぐらい人相の悪い男さ。男は扉を開けたままそこに立ってゐて彼の方に目配せした。すると彼はすつと席を立ち人相の悪い男の方へ寄つて行つた。

扉の所で何やら話している。

女の子が聞き耳を立ててみると「十八歳」「生娘」なんて言葉を彼が言っている。もしかして自分の事を言っているのだろうか、何で自分の話をしているんだと女の子は訝しく思った。非道く居心地が悪くてね、女の子はその間ずっと肩を強張らせたままじつと待つてたんだよ。

漸く話が終つたらしく彼は女の子の方へと戻つて来た。女の子は

やつと帰れると内心ほつとしていたよ。

彼は女の子の髪を優しく撫でた。

自慢の黒髪を大好きな彼の温かくて大きな手で撫でて貰う、それだけで女の子の胸はほっこりと温かくなるんだ。そして彼の笑顔で胸を満たされた。女の子にとって本当に…幸せな瞬間さ。

そして彼は静かに口を開く。

「すまん…」

彼はそう言つて背を向け、女の子を置いてそそくさと部屋を出て行く。扉の前で人相の悪い男からお金を受け取つてね。

子供の頃に見た父親の最後の姿と重なる。父親も彼と同じ言葉を残して女の子の前から去つて行つた。

すまん、と。

もうあんな寂しくて悲しい思いはごめんだ。女の子は弾かれたように立ち上がり彼の後を追おうとした。けど人相の悪い男が女の子の腕を掴んで下品な笑みを浮かべていたのさ。

あの時は小さな子供だったからよく解つていなかったけど、今はもう自分の置かれた状況が解る。

女の子は娼館に売られたのさ。

売春宿つて言えば分かるかい、まあ碌ろくなもんじゃないよ。人相の悪い男が言つには借金で首が回らなくなった彼は借金のカタに女の子を娼館に売つたんだそうさ。

女の子はまた売られたんだ。

また…

…大切な人にね。

あまりにも悲し過ぎて女の子は泣く事すら出来なかった。否、いや、非道ど過ぎて悲しいと思えなかったんだろうね。寧ろ逆に笑っちゃいそうだったんじゃないか、あまりにも自分が滑稽過ぎてさ。

女の子は…

…鳥籠に逆戻りさ。

それからの生活は本当の地獄さ。

毎晩、毎晩。

女の子は色んな男の相手をさせられたんだ。

男を知らなかった初^{うぶ}な女の子の初めての相手は誠実な好青年でもない、優しい紳士でもない、況^ましてや白馬の王子様なんて程遠い。脂ぎった豚みたいな成金親父さ、女の子はそんな豚に髪を嗅がれ、軀に触られ、頬を舐められ、凌辱されたんだ。最悪だろ？

他にも汚らしい男を沢山見た。六十近い下品な爺^{じい}の時もあれば、どこぞの貿易商人だか何だか知らないけど外国人の時もあったんだ。どいつもこいつも金持ちで、臭くて、いやらしくて、下衆な男ばかりだった。その癖そいつらは女の子の事を金で軀を売る卑しい娼婦だと蔑み、見下しやがるんだ。

そんな汚い男共の相手をするのをもし厭がれば娼館を取り仕切っている破落戸^{くわらくこ}連中に引つ叩かれて無理矢理にでも相手させられるのさ。

女の子にはもう自由なんてなかった。

自由の後姿すら見えなくなっていた。

結局：籠の中さ。

女の子はそれでも自由に憧れた。

どうしても諦めきれなかったんだ。今までの人生はいつも人に使役されるだけの人形のようなものだった。だから自由を掴み取りたかった、まだ触れた事も見た事もない自由と言う翼を。

…自らの手で。

ある夜、女の子は娼館を逃げ出した。

勿論自由を掴み取る為にさ。いつもと同じように客が待っている部屋へ行くふりをして、他の者の目を盗んでこっそり外へ飛び出したのさ。娼館の破落戸共に見つからないようにこそそと走って出来るだけ遠くまで行ったんだ。

女の子は生まれて初めて夜の町を独りで散歩した。

派手なスカーフを巻いた娼婦の客引き、何の肉を焼いているのかも判らない胡散臭い屋台、沢山の見物人に囲まれて喧嘩している酔っ払い。

賑やかな夜の町は女の子にとって見る物総てが新鮮そのものさ。

それにさ、空を見上げるとね。

…お月様が綺麗なんだよ。

銀色に輝く真ん円のお月様。

女の子は思わず恍惚うつとろして朦朧ぼんやりと夜空を眺めていたんだ。

糸にも繋がれずに浮かぶお月様。

誰の指図も受けずに輝くお月様。

お月様は自由。

女の子は初めて味わう自由を吟味しながらにこにこと笑っていたんだ。歌でも歌いたい気分だったろうね。

でも、そんな自由も直ぐに終わってしまうのさ。

開通したばかりの鉄道駅を見物している所で娼館の破落戸共に取り囲まれて捕まった。結局女の子は連れ戻されちまったんだ。

女の子が掴み取った束の間の自由は空しくも指の隙間からすり抜け逃げていった。

呆気あっけないだろ。

ガラの悪い五、六人の男達は女の子を小汚い倉庫みたいな所に連れていった。捕まえられた小鳥に待っていたのは…

…お仕置き

…逃げた罰

…絶望さ。

女の子はそこで男達に、

殴られ。

蹴り転がされ。

姦まわされ。

本当に非道い目に遭った。

「お前に自由なんてない」

「お前は人間じゃない」

「お前は道具だ」

「お前は売り物だ」

男達はそんなふうのうに罵りながら女の子を蹴なぐった。それは本当に非道いよ、自慢の真つ黒な髪も、お気に入りの真つ白なブラウスも泥やら埃やら汗やら血やらで汚れて台無しさ。

女の子は自由への憧れも夢も希望も総て失った。

この世に自由なんて存在しない。

みんな何かに囲われ、繋がれ、閉じ込められているんだ。さつき憧れていたお月様だって同じさ、全然自由なんかじゃない。よく考えればお月様だって地球の引力つて鎖に繋がれているんだろ。まるで犬小屋に繋がれている犬みたいじゃないか。

やがて女の子は男達の終わらない暴力に何の抵抗もしなくなった。空しくなつて抵抗する気にもならなかった。生きていてもこの先きつと自分には良い事なんて何もない、そう思ったのさ。

その時、男達の暴力がぴたりと止まったんだ。殴つても蹴つても女の子がうんともすんとも言わなくなったからきつと死んじまつたと思つたんだろうね。

すると男達は何やら相談を始めた。

「どうする」

「どこかに埋めるか」

「いや、焼いちまおう」

女の子を捨てる相談さ。

例え死んでなくなつたつて顔だつて酷い事になつてたから娼婦としての商品価値もなくなつちまつたしね。男達からしたら女の子はもう徒ただの塵芥ごみさ。使えなくなつたから捨てる。

それだけさ。

そして…

その日の真夜中…

…女の子は暗い海に捨てられた。

まだ秋と雖も夜は寒い。

夜の海はもつと寒く冷たい。

躰の力が抜けてゆく、感覚が朧げになってゆく、冷たさに飲み込まれるように女の子は深く沈んでゆく。

眩しい。

真つ暗な筈の海の中で幽かな光を感じて女の子はふと目を開いた。すると水面の向こうで何か…光が蠢くように揺れている。

…何だろうか。

……。

…お月様だ。

波に揺られて形が崩れているけど確かにお月様だったのさ。銀色に輝く爛れた月。それは女の子が最後に見たものになったんだ。

それは女の子が十九歳になった秋だった。

女の子は死んだ。

女の子は沈み続ける自分の躰を見ていた。

…本当に…檻褸檻褸さ。

子供の頃から人に使われてばかりで、何一つ自分で決めた事がなかった。何一つ自由がなかった。

大好きな人に裏切られて売り飛ばされ、道具みたいに扱われて、最後には檻褸雑巾みたいになるまでいたぶられて海に捨てられた。

本当に…

…本当に可哀想な躰。

本当に今まで…

…おつかれさま。

女の子は檻樓檻樓になった頬に触ってあげたんだ。殴られたのと冷たい海に投げ込まれた所為で紫色になっているその頬は思った通り冷たい。

そして命が尽きて尚、薄く開かれたままのまぶたの瞼。

もう眠っても良いんだよ、と女の子はその瞼を閉じてあげようとした。でも、女の子の手は頬に触れる事は出来ても動かす事は出来なくなっていたのさ。それが齒痒かった。

やがて躰はお月様の光も届かない程に深い淵まで沈んでいく。女の子は寂しそうに自分の躰を見送った。

さよなら。

女の子の躰は暗い海の底へと消えていった。

冷たいって感覚もない、海の中なのに息苦しいとも感じない。自らの躰に別れを告げた女の子は頭上で揺らめく爛れたお月様を指して浮かんでいった。銀色に輝く爛れた月。それは女の子が死んでから初めて見たものでもあったんだ。

女の子は水面から頭だけを出してお月様を眺めながら思った。

…何でこんな非道い目に遭うんだろう。

…何で海に捨てられたんだろう。

…自由が欲しかっただけなのに。

…でももう良い。

…今はもう…やっと

…自由になれたから。

そう。女の子は死んでからやっと自由を手に入れたのさ。

もう誰も女の子を咎める者も縛り付ける物もない。死ぬほど憧れた自由は本当に死んでから初めて手に入ったんだ。皮肉な話だろ。

自由を手に入れた暁に女の子は先ず何をしようか考えた。お腹一

杯ご飯を食べようか、お洒落して町に出ようか、一日中ごろごろしながら本でも読もうか。今まで出来なかった事が色々と頭を巡ったんだ。

でも、それはもう出来なくなっている事は女の子も解っていたんだよ。だって自分にはもう躰がないんだ…つまり、自分はお化け。何となく解っていたのさ。

そこで女の子は今の自分にもできる事を考えた。それはもう一つしかなかった。

…誰に殺されたんだっけ

…誰に海に捨てられたんだっけ

女の子は自分でも信じられない程の悔しさ、憎しみ、怒り、怨みで胸が張り裂けそうになった。生温かい腐った泥水が躰中に巡り渡ってゆく、そしてそれが沸々と泡を立ててぐらぐらと沸騰していくような感覚を覚えた。

女の子には最初の目的が出来た。

復讐。

それが女の子の存在理由になったのさ。

存在してゆく目標を得て喜び打ち震えていると、女の子の躰は俄かにどろどろと爛れだしたんだ。

女の子は悪霊になった。

勿論、復讐しようと思った相手は自分を殺した破落戸共さ。奴らにも自分と同じ目に遭わせてやろうと思ったんだ。

つまり殺してやろうとね。

幸い女の子は奴らの顔を確りと覚えていてね、まあ忘れようにも忘れられない顔さ、何たって自分を殺した奴らなんだからね、厭と言っぐらい目に焼き付いていたんだ。女の子は奴らを一人ずつ確実に殺してやろうと思った。

そいつらは直ぐに見つかったよ。悪霊の女の子は次々とそいつらを殺していったんだ。まるで自分自身の仇を討つようにね。

直接頸を絞め殺してやった奴もいた、崖から突き落としてやった

奴もいた、自分と同じように海に引き摺り込んで溺れさせてやった奴もいた。どいつもこいつも死ぬ間際に女の子の方を見ると目を剥いて、鯉みたいに口をぱくぱくさせて、真っ青な顔になるんだ。まるで女の子の姿が見えているみたいだね。

恐怖に引き攣った顔さ。

女の子からすればそれはもう良い気味だったよ。こうして女の子は復讐を果たした。だから悪霊としての存在理由もなくなった訳さ。

でも女の子は消えなかった。

まだ未練があるのだろうか。自分が未だこの世に存在している事に女の子は不思議に思ってたんだ。

…そうだ。

…まだだ。

…まだ、もう一人いる。

女の子は思い出した。

この世で一番非道い事をした奴、一番非道い裏切りをした奴。自分がこうなってしまった原因はあの男にあるんだ。自

あの男が自分を売ったから…。

この世で唯一愛した男。

そして

この世で最も憎い男。

女の子は嘗て愛したあの彼を殺す為にどろどろと溶けだした軀を引き摺りながら彼の元へと向かった。

町外れの小高い丘の上にある小さな家。

土壁。

瓦屋根。

総てが最後に見た日のまま何も変わっていなかった。

しかし女の子が家の中に入ってみると誰もいなかった。部屋も散

らかったままだったから直ぐに帰って来るだろうと思って暫く待っていたのさ。その間もどう惨^{むじ}たらしく殺してやるうかとかそんなの事ばかり考えていたんだ。

夜になつてもあの男は帰って来なかった。

どうせまたどこぞの女でも騙して酷い目に遭わせているんだろう、とことん下衆な男だ。女の子はそんな事を思いながら玄関に座った。靴箱が半分開きつ放しだったんだ。とことんそっかしい男だと女の子は思ったよ。

女の子は屋根に上った。

…ここであの男を待ってしよう。

ふと夜空を見上げるとまたお月様が綺麗に出ているんだ。生きている時、昼間しか屋根に上った事が無かったからこれは初めて見る光景だった。

屋根の上から望む月。

やっぱり自由の身になつて眺める月は本当に綺麗だった。今夜はもう暫くこの屋根から月を眺めてしよう。

…あの男を殺すのはその後でも良い。

女の子は瓦屋根に腰を下ろして朦朧^{ぼんやり}と月を眺めていた。

でもね…。

待てど暮らせどあの男は帰って来なかった。それでも雨の日も、風の日も、雪の日も女の子は凝^{じっ}と屋根の上で待っていたのさ。

やがて一年が経ち、季節はまた秋に戻っていた。でもあの男は戻って来ない。女の子は時々町に行ってあの男を探しに行ったりもしたんだ。それでも見つかりはしなかった。もしかしたらどこか遠い町へ行ってしまったのだろうか。そんな疑問を抱えながらもその屋根の上ですつと待っていたんだ。

それから女の子が屋根の上で幾つの秋を過ごした頃だろうか…。やがて戦争が始まったんだ。

知ってるだろ、昔この国で戦争があった事は。ある日、空に外国

の飛行機が飛んで来てね、町に雨でも降らすかのように焼夷弾を落としていった。町も全部焼けちゃって、人もたくさん死んだんだ。だけど女の子が待っている家は全くの無傷で残った。不思議な話さ。町外れにあったからきつと見つからなかったんだろっね。

そして、戦争は終わった…

…この国が負けたんだ。

でも、やっぱり男は戻って来ないんだよ。

屋根から眺める町はもう町とは言えない程に壊されていてね、徒^{ただ}の焼け野原さ。あの男も空襲で死んでしまったのだろっか、それとも徴兵されてどこぞの国の南の島か密林^{ジャングル}で戦死したのだろっか、それとも…この国のどこかで未だ生きているのだろっか。

…生きていて欲しい。

女の子は不思議とそう思ったんだ。

変だろ。あれだけ憎んで、あれだけ怨んでいた男の無事を願っていたんだよ。その時は「自分の手で殺してやりたいからそう思った」と自分に言い聞かせただけど、変な気分だった。

それから十年、二十年と時は流れていった。

女の子は待ち続けているんだ、たった一人で屋根の上で空を眺めながらね。焼け野原だった町も元通り、否、それ以上に復興して賑やかになっていたよ。ホント人間ってすごいよね。

確実に時代は変わってゆく…

…女の子を置いてきぼりにして。

三十年、四十年…。

町はもう女の子が生きていた頃とは全くの別物になっていた。戦争を体験した者も殆どいなくなっていた。勿論、女の子の事を知っている者などもうこの世にはいない。女の子はこの世で本当の孤独を味わったのさ。辛いだろっね。それでも女の子はずっと屋根の上であの男を待っているんだ。

何故だと思う？

いつしか女の子からはあの男を殺したいと言う怨念も失せていたんだ。

…彼に会いたい。

…もう一度だけでもいい。

…会いたい。

もうそれだけだったんだよ。

気が付けば女の子は悪霊じゃなくなってたんだ。肩に掛かる自慢の黒髪、お気に入りの白いブラウス、全部元通りさ。躰もどろどろじゃなくなっていたしね。

女の子は何となく解ったんだ。

決してあの男を殺したいからずっと待ってるんじゃない、勿論最初は本当に殺そうと思っていたし、殺し方だって何百通りも考えた。けど待てば待つ程…何か…変な気持ちになっていくんだ。無事でいるんだろとか、元気でやっているんだろとかかね。

そうさ。やっぱり女の子は…

…彼の事が好きなんだ。

莫迦だろ、自分を裏切って売り飛ばして地獄へ叩き込んだ男の事をだよ、そんな野郎をまだ好きとか言ってるのさ。

女の子は毎日、屋根の上から町の方を眺めていたのさ、時々寂しくなったりもしながらね。

本当に…莫迦だよ。

結局、女の子は死んでからも自由にはなれなかった。彼に会いたいと言う自分自身で作った鎖で自分自身をこの世に縛り付けて繋ぎ止めているんだ。

五十年、六十年…。

もう彼は生きていない。

戦争で死んでいなかったとしても、もう彼や女の子が存在していた時代ではない。だからもう彼がその小さな家に帰って来る事は永

遠くない。

そんな事、女の子は解ってるよ。

でも女の子は待ち続けているんだ。ずっと屋根の上で町を眺めながらね。

時代は女の子が生きていた頃とは大きく変わってしまったている。

白黒どころか色付きのテレビもある、ポケットに入る電話もある、車だって沢山走ってる、仕舞いにはお月様へ行く事だって出来るようになった。そんなふうに時代は変わってしまったんだ。でも、女の子の思いだけは変わらずにいるんだよ。

女の子は毎日欠かさず町にも彼を探しに行く。懲りもせずにそんな事を何十年も続けているんだ。

絶対に見つからない探し物だけだよ。

：もしかしたら彼の生まれ変わりにでも会えるかもしれない。

そんな事でも期待してるんじゃないかな。

でも、あまりにも長い歳月が流れ過ぎたんだ。彼の名前も、彼の顔も、もう明瞭はっきりと思えないんだ。本当にそんな男の人がいたのかと自分の記憶を疑う程に長い時が経ち過ぎた。

それでも彼に会いたい、彼が好きだ。

そんな思いだけが女の子の中に確りと残っているんだ。思いつてのは本当に厄介な鎖だね。こんなに苦しいなら何十年も前に破落戸をぶっ殺しただけで満足して悪霊のまま消滅した方がよっぽど楽だったろうね。

きつと女の子はこの先もずっといるよ

いつもの瓦屋根に…。

ずっとね…。

何年も、何十年も、もしかしたら何百年も、少なくともその小さな家がある限り女の子はその瓦屋根の上で待ち続けるんだ。莫迦だからね。

この先もずっと。

この世で最も憎くて、最も愛しい彼をね。

屋根の上から望む月

ひなきは話し終わると背伸びをして瓦屋根に寝転んだ。ひなきの黒い髪が屋根の上にはらりと広がる。私も同じようにひなきの隣に寝そべった。

「ね、何かアンタに似てただろ…その女の子」

私は小さく頷く。

いつの間にか夕陽は沈みかけていて空にも少しずつ夜が浸食しかけている。昼と夜が混じり合った空は赤と青の絵の具を溶き合わせたように鮮やかな紫色に染まっていた。

「ほら、ご覧よ繭子ちゃん」

ひなきは紫色の空を指差す。

「お月様さ、一番星より早く出てるよ」

私はひなきが示した銀色の光の球を朦朧と見上げる。

ここから望む月は私が生きていたときに見ていた月とは何か違って見える。それがどう違うかは上手く言い表せない。

ひなきの言っていた通り月も地球の引力に繋ぎとめられている不自由なものかもしれない、屋根の上の女の子も自らの思いという鎖に繋ぎとめられている。そして、私も同じようなものなのかもしれない。

「で、アンタこれからどうするのさ」

私はひなきにこの質問を何度されたことだろう。そしていつもこの質問に私は口籠ってしまう。

「アンタも悪霊から普通のお化けに戻ったんだろ、でもここに残る方が色々辛い事も多いと思うけどねえ…変にこの世への未練が強くなる前にさっさと成仏しまつたらどうだい」

確かにひなきの言う通りかもしれない。もしかしたら私も思いの鎖に縛られて永遠に近い時間、この世に繋ぎ止められてしまつかもしれない。

それでも私の答えは決まっていた。

「私は…もう暫くふわふわしますよ」

そう言って私はにこりと笑う。

「アンタ本当に莫迦な子だね、妾と同じで本当に莫迦さ」

瓦屋根に寝そべったまま私達二人は笑った。

お腹が痛くなる程笑った。瓦屋根の上で誰にも聞こえない笑い声が暫く続く。

今夜も月が綺麗だ。

屋根の上から望む月。

本当に…綺麗だ。

確かに私と屋根の上の女の子は良く似ている。しかし実は私と彼女、一つだけ大きく違う所がある。

私は誰も殺していない。

正確に言つと殺せなかったのだ。

あの時、悪霊だった私は目の前にいる美妃の首に手を掛けて絞め殺そうとしていた。でもその時二人の写真が目に入った。

罅割れたフレームの奥の二人は眩しい程の笑顔。

美妃も笑っている。

そして…

…翔も笑っている。

そうだ。私はこの笑顔を見ていたかったのだ。彼の幸せを見守っていたかったのだ。もしここで私が美妃を殺してしまうと翔から幸せを奪ってしまう事になってしまう。そして彼はまた笑わなくなってしまう。

…私は馬鹿だった。

確かに美妃は私の事を殺して私から翔を奪った。だから殺したいぐらい憎かった。でも翔に幸せを与えられるのは他でもない美妃だけだ。

そう思うと私は美妃の首から手を離れた。

美妃はきつとこの先、私を殺した事で裁かれる事はない。

しかし裁かれない罪ほど重くて苦しいものはないのだ。美妃もまた、罪と言う鎖に縛られ繋ぎ止められながら生きてゆく事になるのだろう。誰もいない屋上で懺悔していた美妃の姿がそれを生々しく物語っている。

もしかすると彼女は私よりも遥かに苦しい思いをしているのかも知れない。その苦しみによって美妃は十分に罰を受けている筈だ。

…美妃。

…私は美妃を許してあげる。

…その代わり

…絶対に

…翔の笑顔を絶やさせないでね。

心の中で美妃にそう呟くと胸の中が軽くなり、私の臍を包んでいたどろどろしたものが凝固した。そしてそれは乾いた泥のようにぱらぱらと剥がれ落ちたのだ。

私は悪霊ではなくなった。

美妃の臍をすうと透き抜けて私はソファに座っている翔の前に立つ。翔は相変わらずの優しく温かい笑顔をしている。

その笑顔を見て思わず私も笑顔になった。

…やっぱり私はこの笑顔が好き。

…やっぱり私は翔が好き。

私は翔の頬に接吻くちづけをした。

私はもう暫くふわふわしようと思う。

この素敵な笑顔を見守りながら。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7883n/>

屋根の上から望む月

2010年10月8日12時13分発行